

小笠原諸礼大全

卷之上

9
421
1

日本礼の始り人皇三十七代孝德天皇礼を定め給ふを後小笠原
源の祖八幡宮御家の所并新羅三郎有光の記る甲斐國邊見
武田家小笠原三郎兄弟の家武家の法式を定めらる小笠原中
貞和礼の監修と云ふ凡十八代後醍醐天皇の時小笠原信濃守貞
宗の故実を著し信濃守が礼殿と云ふに云ふ帝威感とて
小笠原貞宗御殿を修され天下に傳へ給ふを孫小笠原玄庵
正長秀の筆で満云は云川氏に傳へ給ふ武家の満忠三入陰
武家の礼法を定めらる於て長秀満忠の古礼を参考し一書と
撰み歟即三義一統武家法集といふ書連院書とてこれを
書とすに弘治給ふ其書尚今世に流布に在る人の知りて知
る小笠原代々傳へる家として武家に仕へ礼法の師範と爲る

法橋玉山著

小笠原諸礼全

石玉峯画

明治三十八年十月十二日

坪内祐三氏寄贈



人。夫は、
 一、九、
 二、若、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、

目録

礼の奉を知悉ききり	五丁	元三歳暮の礼の奉	五丁
又今日の奉	六丁	又今日八朝の奉	六丁
朔日十八日二十八日の奉	八丁	麻と下裏着と下れ	八丁
時服の奉	九丁	帷子の奉	九丁
給并草物の奉	九丁	襦袢の奉	十丁
白垢の奉	十丁	お祓の奉	十丁
礼の真草の奉	十丁	美人の目見の奉	十二
奏者さき目見の奉	十二	小せ又用きの奉	十三
麻子ふ故実あきり	十三	花着さきかけ着の奉	十三

月をへ致給抄	十六	美人の若みきり	十八
美人(書状)をきり	十八	麻子小刀と糸の奉	十九
硯料紙をきり	十九	月云私何の奉	二十
儀紙を御用ひきり	二十	連袂の着衣の奉	二十
花進上の奉	二十	掛物とかく	二十
月散り給抄	廿一	掛物生花の奉	廿一
冬まきやうの奉	廿一	着をきり	廿二
月抄(手紙)抄	廿二	御茶碗の奉	廿三
人の腰の物見換の奉	廿四	美人の刀服の奉	廿四
御おあきり	廿五	小神の奉	廿六

楊枝と糸とるる 九六 沖腹不え中へれ幸 九六
 系抱遠れ途中とて美人よととれをたりの 九六
 月を一秋 九六 基お基盤更換の 九七
 美人小座お至附の 九七 美人私宅へ附の 九七
 美人小座下る附の 九七 亭より送られの幸 九八
 甲冑を見るる 九八 風呂ぬるる幸の 九八
 土座のれの 九八 人をもと書物見換る 九九
 屏風立中りの 九九 美人の糸れて廊つゝ 九九
 燭臺最中りの 九九 若座附置に候る 九九
 衣紋つきの幸 三十一 月をい歩むるの 三十一

座の抱膝蹴へる 三十一 言葉はきの 三十一
 途中人よはととる 三十一 座のあゝらひの 三十一
 美人の糸をもとる 三十一 桐座并満るの 三十一
 澤定及儒嘉詩歌を講澤の座へ出る 三十一 鞠見換る 三十一
 鞠場をへ秋 三十五 衣を脱中りの 三十五
 幕出入の幸 三十六 窓の幕お中りの 三十六
 内幕く更 三十六 暖まくの幸 三十六
 附連まくの 三十六 惣の幕を幕の 三十六
 月教歌図解 三十七 障子換出入りの 三十七
 小座を換るの 三十七 臺より下換の 三十八

廣蓋ふほむる 三十八 小神以載のり 三十八
 小神より下をふりしりて降りる時をいふのり 三十八
 臺より魚獲申しける 三十九 日教りる時の事 三十九
 臺よりる積換のり 三十九 日教りる時の事 三十九
 日をへ秋 三十九 葬れえ事 四十
 葬場に帳と付る 四十一 焼香并仕廻れのり 四十一
 日をへ秋 四十一 客をいふのり 四十二
 亭よりいふのり 四十二 夫人并女の時珍しき事 四十三
 通の者よりいふのり 四十三 女長の事 四十四
 通の者膳持申しける 四十四 飯のにき申しける 四十四

汁かへ申しける事 四十五 膳部之圖 四十五
 左右向ふ通いのり 四十五 通ひらぐいのり 四十五
 破人公けの事 四十六 襖子と裳と申すのり 四十六
 盆の元と隔るる 四十六 下軍の盆をいふ 四十六
 三献の事 四十七 吸物肴のり 四十七
 せこそ入るる 四十七 臺物押出換のり 四十八
 ろろ茶の事 四十八 窓座の臺のり 四十八
 座敷をいふのり 四十九 食籠申しける 四十九
 座敷をいふのり 四十九 飲食の事 四十九
 飯を強るる 五十一 汁入るる 五十一

東京市立図書館蔵
 江戸町百拾番地
 坪内雄蔵



物喰へ怯へき病なり	四十九	湯はけのり	五十一
凡て食とる箸えき	五十三	流菜のり	五十二
夫人引物み付のり	五十一	肴く幸	五十三
盃献酬のり	五十一	河流の夏	五十四
河盃以載のり	五十二	河通ひのり	五十四
人なごとの幸	五十四	中舌のり	五十五
石出のり	五十五	具足の解のり	五十六
美人相傳是昭のり	五十五	響のるれ幸	五十七
月をへ歌	五十六		

目録終

小笠原諸禮大全 卷之上

○禮の本を知るべき事

禮の本とは人の敬の二つなり内よりやまひ
 怯むを深く外より其敬の形容と物無二
 何れもこれをれはなり或る若くは素へ
 朋友よりあるふるれくの心の敬ひをましく
 のかたよりありて衣類の文飾り物の形
 までも敬ふ意をそれ物よりとりて
 敬ふのかたして害をうりてに人増極に
 美く敬はしうりてこれの本にまじりて

裏のちげりてをくらひ膝一げありききりし靈うつるを
かきへし一もも墓をきよむりけ月をかきふけりてあふ石津と排
い除きし燈籠をきよむ供物を焼く其人の用捨はきよむ
△九月九日おかけの菊の宴ありし人も唐人は何のともみ見
どこれしけ通りてし其外六月十六日嘉祥十月まのまききり
はうこま執りし終人式のまききり下まききりまききりせにれり
まききりまききりまききり

○二十八日の二十八日

はしるまききりしあききり
菊の宴をききりし
○上下のひしあききり
まの遠制まききりしあききり
のまききりしあききり
秋の菊の宴をききりし
のまききりしあききり

○朔日十月二十八日の事
朔日十月二十八日かききりしあききり二十八日
當時武家方専礼の式日なりし其の古案
多かききりし人なり世まききりしあききり
はしるまききりしあききり

○麻と下裏付と下の事

又麻と下裏付と下の事
の裏付と下裏付の事
あききりしあききり
付と下裏付の事
肩衣よりしあききり
付てまききりしあききり
の若のしあききり

上下の麻と下本式なり裏附と下の事
なりあききりしあききり
是廿八日かききりしあききり
若しあききりしあききり

○時服の事

時服の事
おかけの若のしあききり
○時服の事
はあききりしあききり
九月九日かききりしあききり
神のまききりしあききり
そのあききりしあききり

時服とは時節おかけの定服の事なり月
朔日より又月日かききりしあききり
八月晦日かききりしあききり
拾月九日かききりしあききり
○帷子と下の事

○帷子と下の事
帷子と下の事
あききりしあききり

帷子は深帷子七夕中元八朔の五紋
帷子と下の事

此の服はねさるゆゑ名づ
くしつり

○まのりまの三股と委く

つへ耐へまの中よりまのり

まの三股ありおの中は

まのりまありまの中は

まのりまありまの中は

まのりまありまの中は

まのりまありまの中は

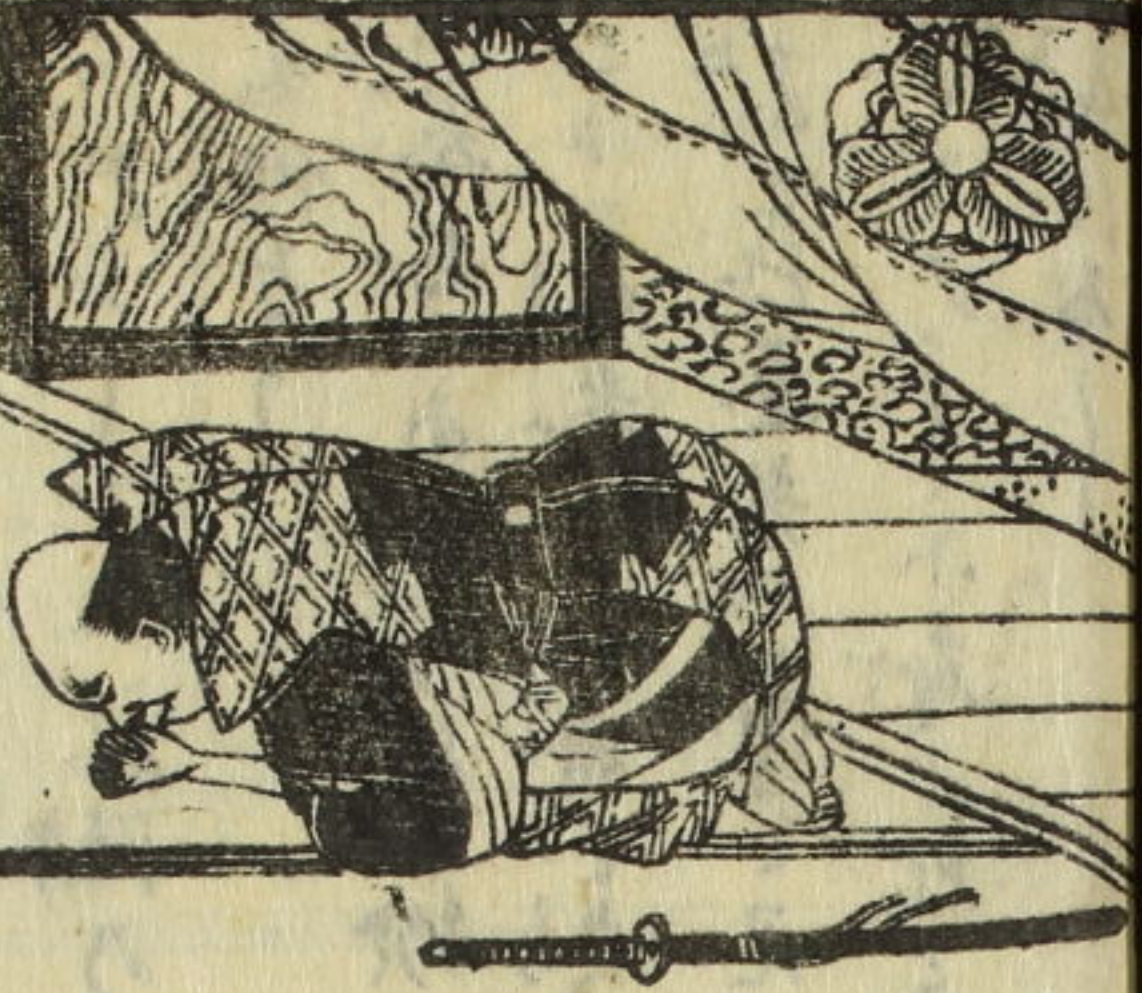
まのりまありまの中は

まのりまありまの中は

まのりまありまの中は

まのりまありまの中は

まのりまありまの中は



○真々れ

危右のものをくちへせ

のもにつかひに取と

かうこれまへ

まのりまあり

かう

着の自由よき乃又制せしめなり元来

定服はつれに服はあつて羽織は着ぬと

ても五れはあつて今れ世羽織を片衣同様の

礼服と名づぬるは故実と云ふは仕業

○れは真々草のり

礼をうけの客儀よりつるは

下るのをつる其高貴は草下草へのれと

まのりまの三股はまのりけと中下の二股

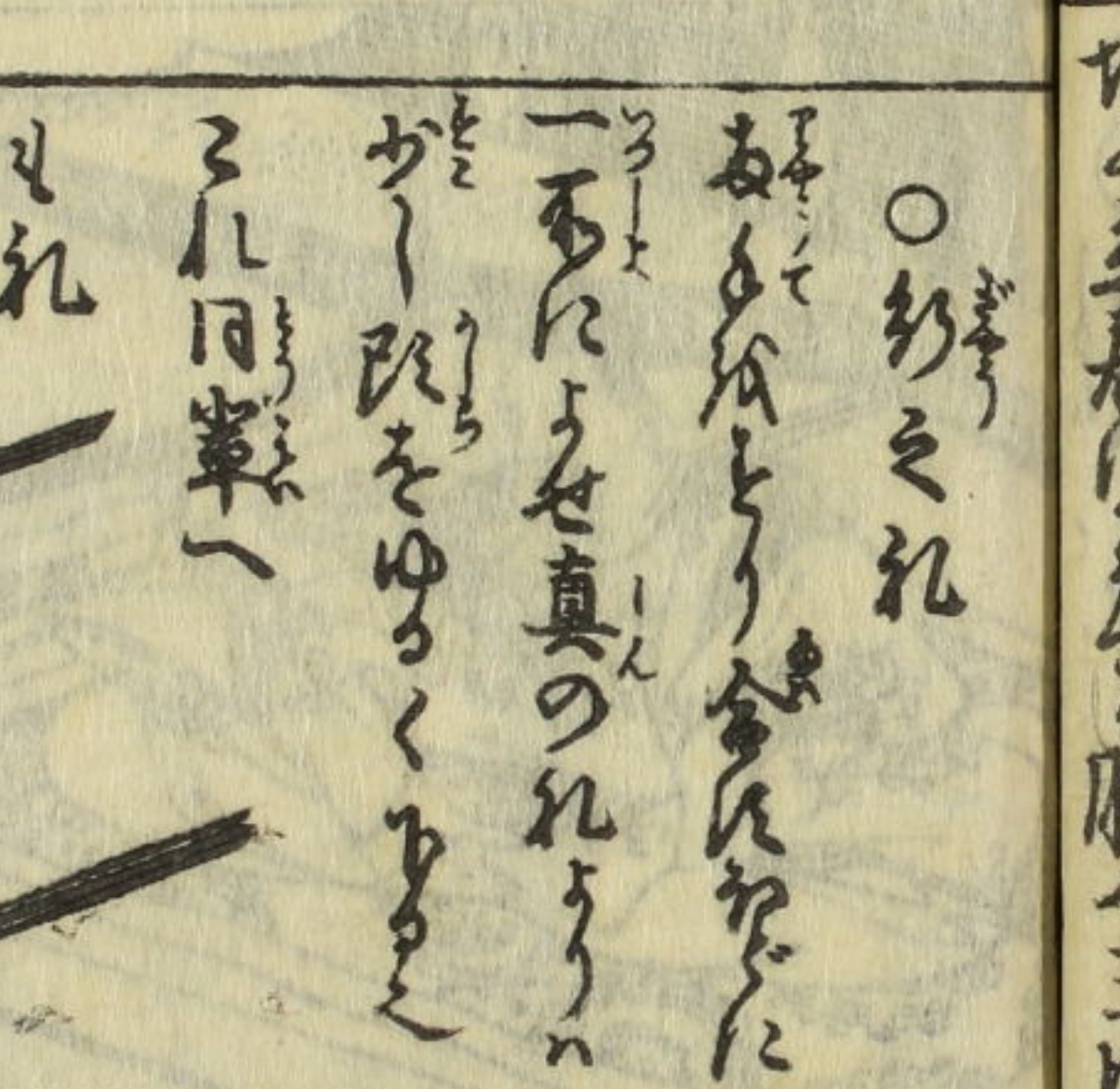
まのりまの三股はまのりけと中下の二股

まのりまの三股はまのりけと中下の二股

まのりまの三股はまのりけと中下の二股

まのりまの三股はまのりけと中下の二股

まのりまの三股はまのりけと中下の二股



○おまれ

おまれとて金に

一むれを真のれ

かう取をゆくり

これ同草へ

れ

かう



○草々れ

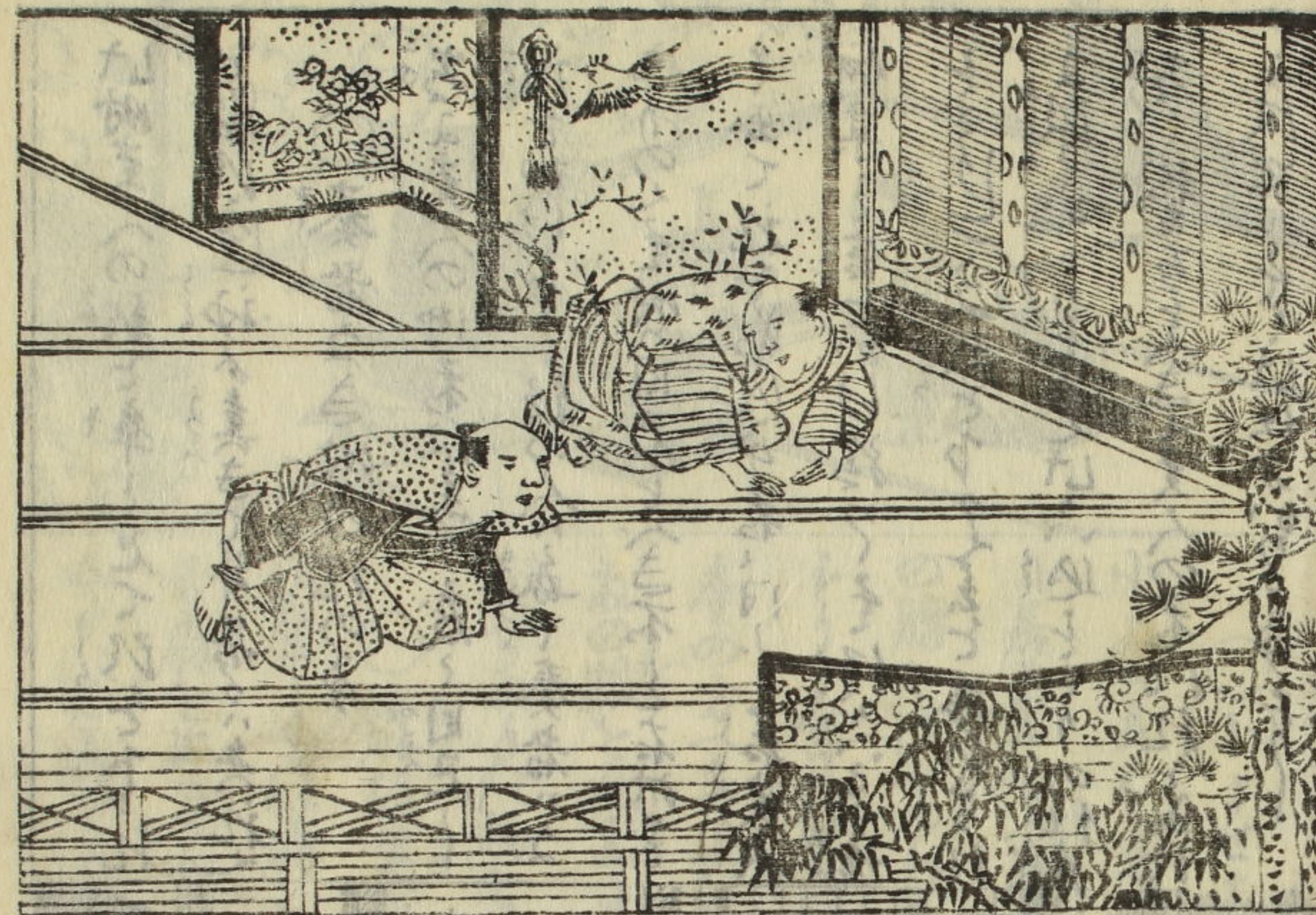
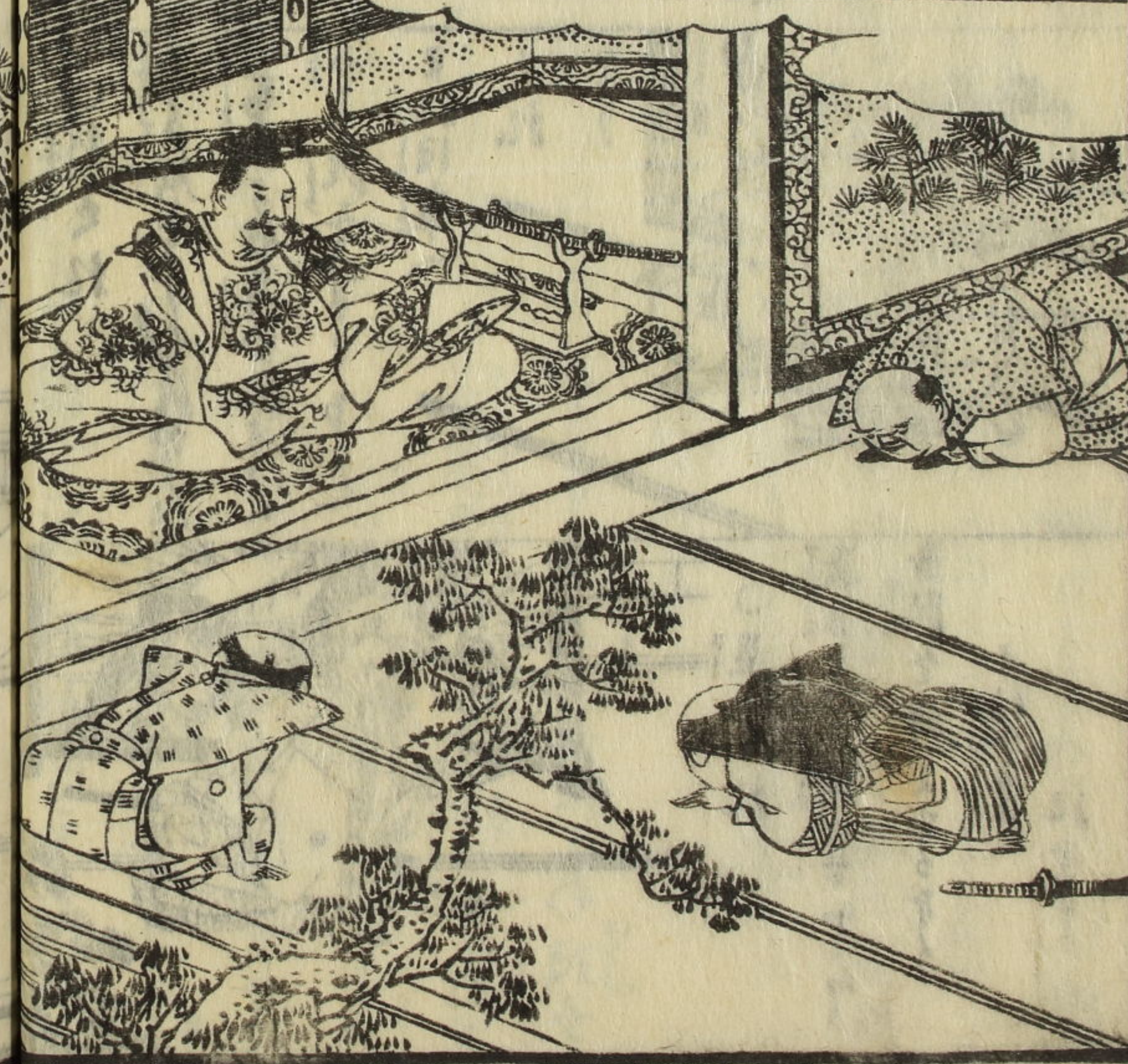
あまとつ同にす

き取をゆくり

これ下草へ

れ

〇余はもろにうま
 らく知る
 撫でて乳をひくふまゐた
 かへ年さげて肩とさけ
 だれか肩筋のきて見せし
 肩背くも乳とやぐさ
 勿論腰のまれも寝たり
 腰肩改めしころかた
 けれどこれれ法の
 不他なり
 〇奏者のあふつれて
 こころ奏者は「お國と
 ませは奏者の居ると見
 こそけさう小座れと
 ぬれど

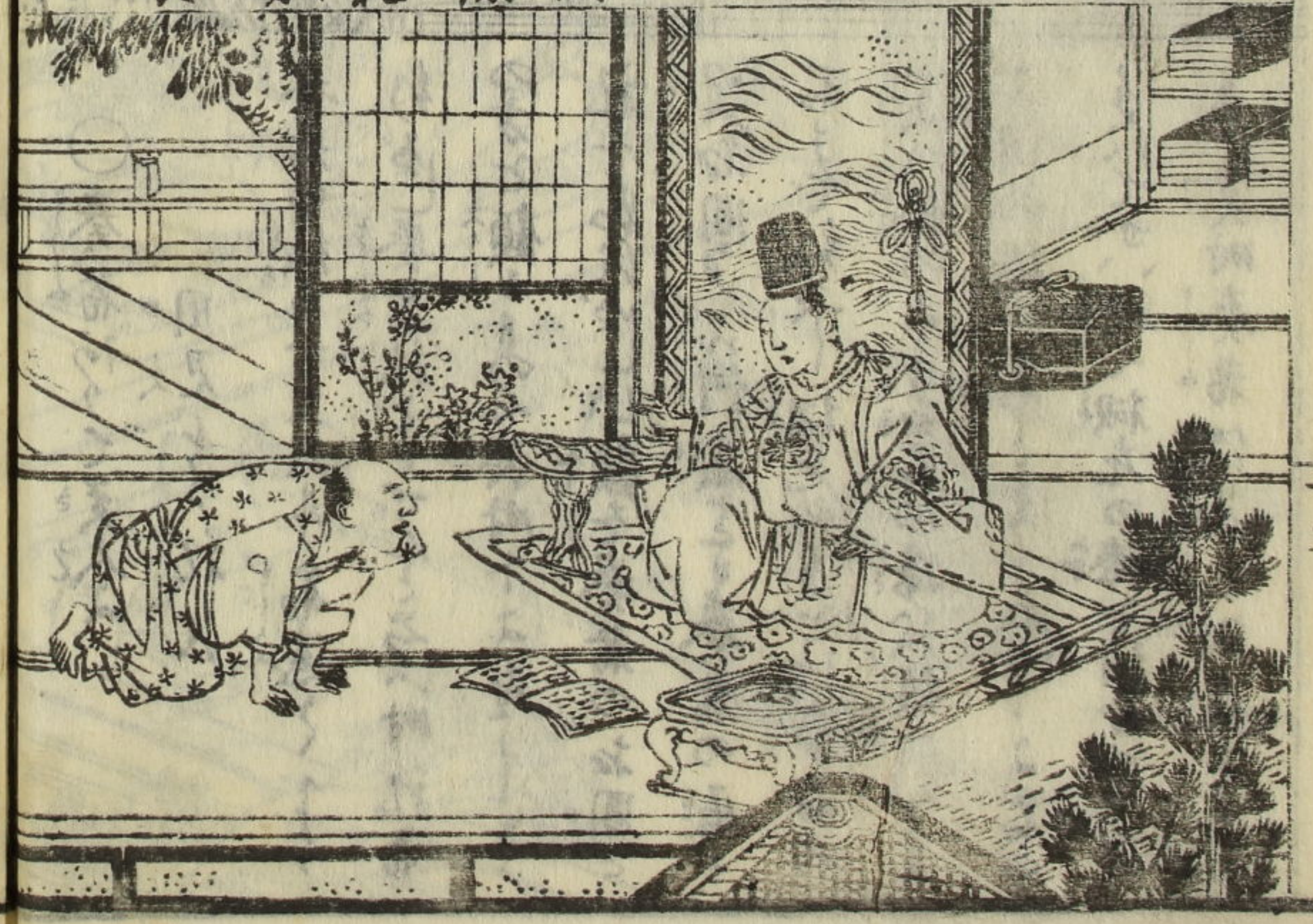


〇奏者何うてまへ
 目見とるれ法
 奏者の後乃方三尺斗箱通く
 けり「奏者れとてさへく時れ者
 の方と顧るゝ人其時下と座し
 れをぬれけり「顧を奏者のお國と
 つお國うゝ何處とも奏者の居
 不きでけり「楓花のよとさき石の
 〇み膝の上とさき石の膝後へ引こ
 又膝の裾のふとさき石の
 〇にてか、込へ楓花の膝と引合せてま
 〇と実時奏者何某と披きぬと

け付まへへの教と華と見て既を下れ
と如く「神を真きて斗居る矢れ之

○奏者なき時乃れの事

此は美人の御前にあり度く目見
河をのけらる程の人の毎く奏者の
さうのくを附の目見とさふをたれど
く出てれど如くのみ目見若夫人
何某と言とかけ給りてを候ふと流
とさして又既とやうとを移ひられ
又改かゝいさういけふ迄とさりのはす
あゝ就常おもふさう美人の如くは
あはれとくもけはあかろふなり



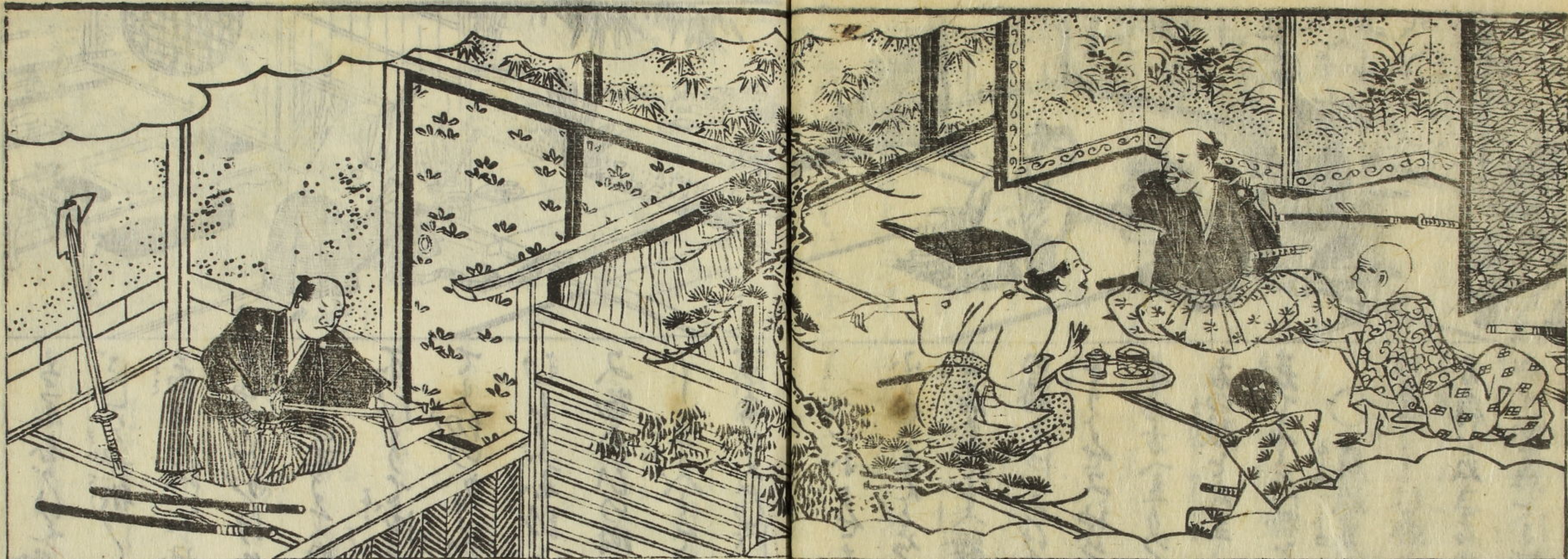
○小せえいりきれり

小せえいりきれりやう居敷とよけあまを九ま足の跟の上
は居敷をより腰とより右のより左のうへより下座の方
の膝とよけあげて用き板ゆき膝とゆき用き膝の毛へ
よりよせ又ゆき用き膝より踏出へき何方よりより
座の方へよりより教とてえんとよりより居敷の下にて
あゝの跟と九まよりゆきえり」○大開きより長と下と
若てあゝの物と若て時膝と若て若て長袴でけりより

○居敷実の事

居敷実の事と居敷と離るる若き居敷とよけ居敷をよき
居敷とぬき若の膝服とあうりさまにいつく入るる
居敷に居敷とよけさうさうとよけぬくへりさ不易の故実





○老若若に心づけ

毎一ふれ事

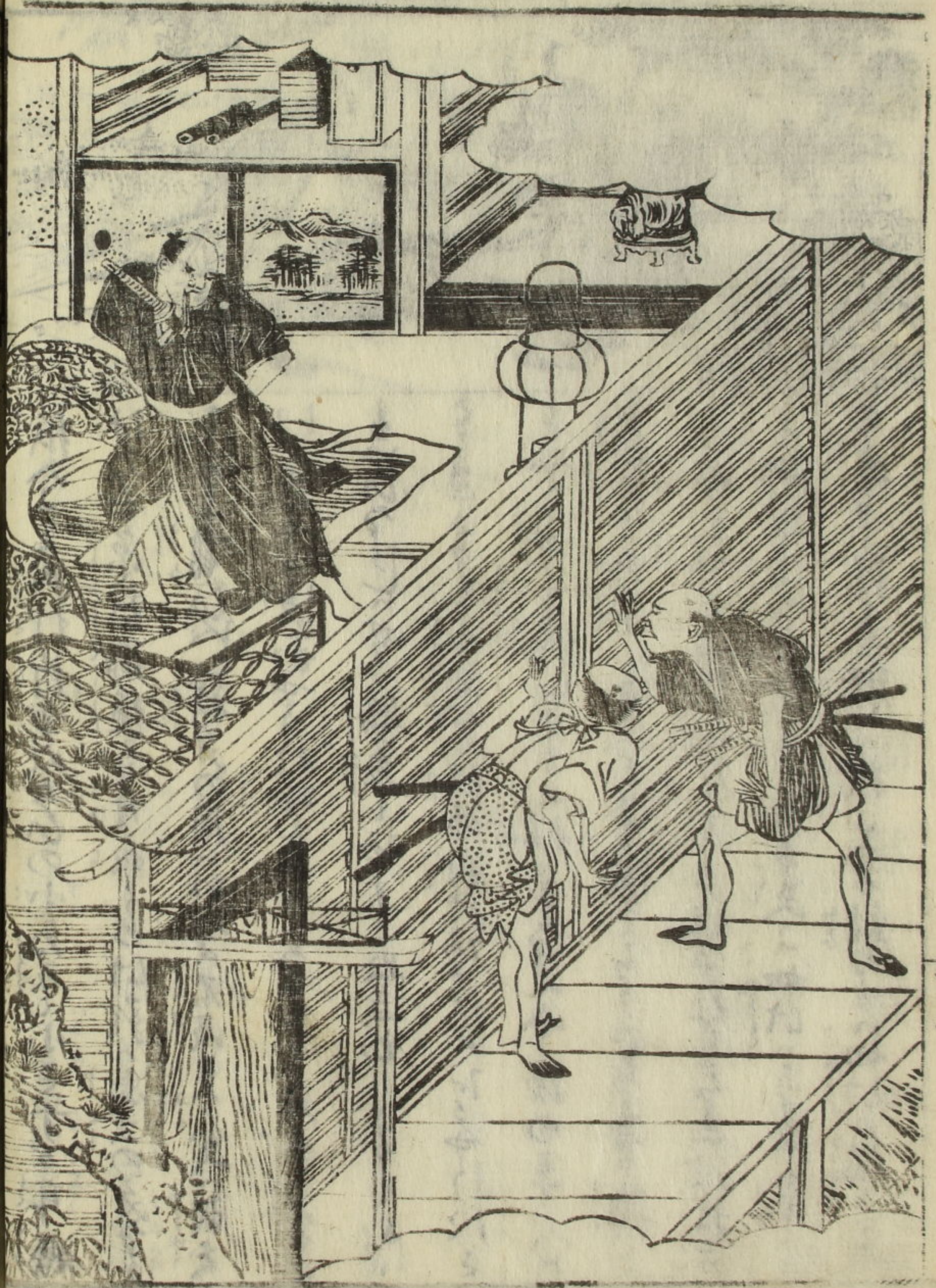
衣履あいつつ方又付裁を
 一むお意とあるや第一
 若き者の向まり人ともひく
 年考凡ふんゆりより
 されはくたてとこのめだ
 何れ又中年以後乃人
 若き者の風情を不おも
 人ともふしよりふも年
 意あつて一老若とも
 何れをきいたひきされ
 なともふつ一む
 かのれ言とかうい
 ひは論乃本なりいふ心
 といふなりともふ
 んあてたいふいふ
 人ふ名と付てふふ
 くあるなり
 又及び平人とも
 をうれなり
 若き者一髪と大なる



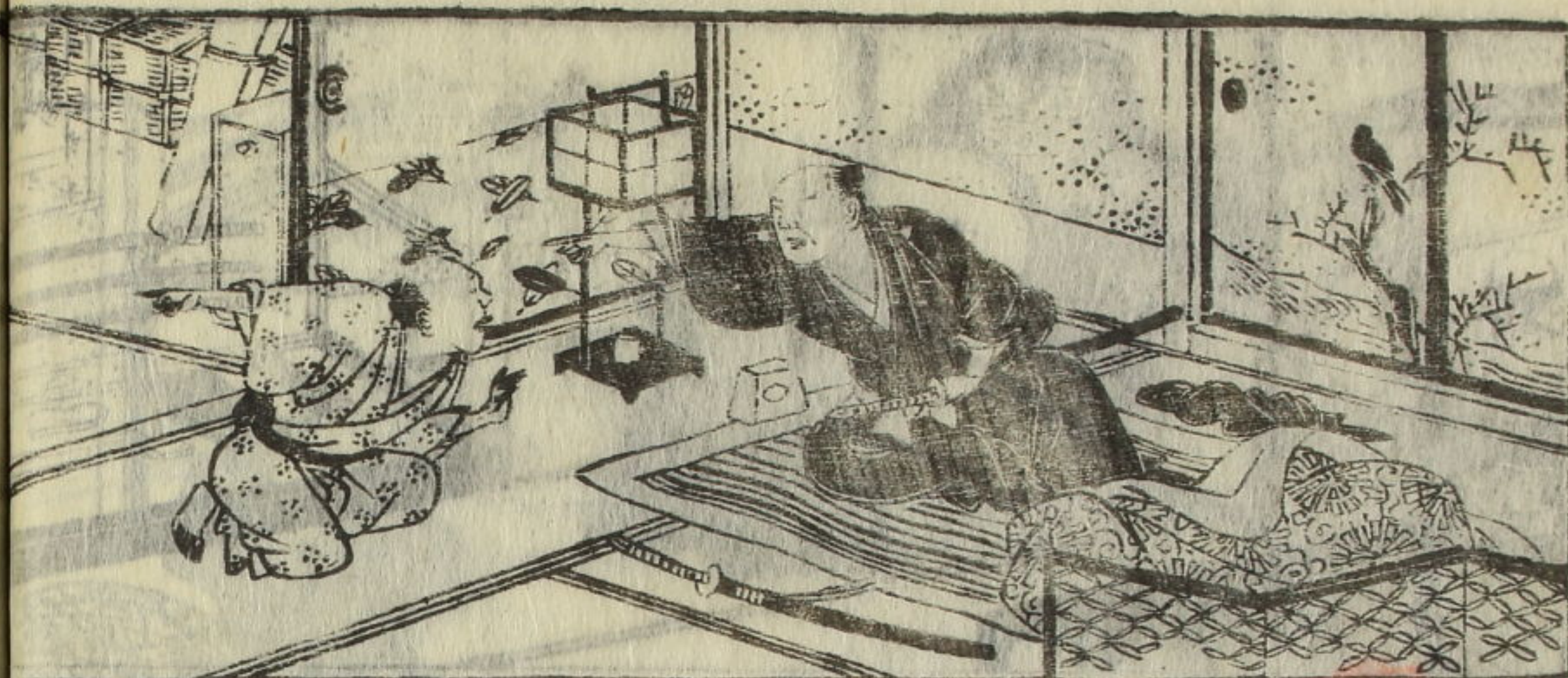
ちふをぐけん帯の幅は廣くは細くは「刀服
 ばい毎朝く埃と掃いぬにぐく一鉢たぐ付
 最ととく一月十二度でぬきて拭い襦の出さ
 るや心かけ并一々甚い汗きて襦はたりのん
 人なきあそぬきぬらひ風よりてゝゝめるがよう
 ぬよりて少のきとい切のかきいより襦襦を
 て切のかきいよりたより大のきぬきかそく引
 ひとぶふははは踏て人ふあひぬぐよりとる
 又物あひの時よく繕ひ繕のをきいともたけま
 一平人よりあふ新き鼻紙一枚新きを拭
 ツギ一ふは「用はるるま」又印は新巾着鼻



紙入は目打竹刀ぬらひの小なぐ小とすが耳搔
けぬき糸針櫛鏡を付ぬらひけ敷の奉公の女
どもも嘴^{くちばし}に^{まづ}我方の用い^{とよ}な^{きみん}な^{かみん}不及^{かみん}美人^{かみん}又^{かみん}の朋友
にも用^{とよ}なる^{きみん}は^{かみん}か^{かみん}中^{かみん}の物を^{かみん}多^{かみん}く^{かみん}な^{かみん}ま^{かみん}う^{かみん}の^{かみん}五^{かみん}葉^{かみん}草^{かみん}と
も^{かみん}の^{かみん}し^{かみん}に^{かみん}せ^{かみん}う^{かみん}脇^{かみん}差^{かみん}し^{かみん}の^{かみん}ま^{かみん}り^{かみん}ぬ^{かみん}き^{かみん}出^{かみん}し^{かみん}る^{かみん}り^{かみん}あ^{かみん}り^{かみん}
こ^{かみん}の^{かみん}こ^{かみん}う^{かみん}も^{かみん}不^{かみん}用^{かみん}心^{かみん}之^{かみん}務^{かみん}の^{かみん}脇^{かみん}に^{かみん}あ^{かみん}り^{かみん}な^{かみん}る^{かみん}中^{かみん}う^{かみん}に^{かみん}と
も^{かみん}一^{かみん}刀^{かみん}も^{かみん}落^{かみん}し^{かみん}ご^{かみん}い^{かみん}奴^{かみん}さ^{かみん}る^{かみん}ゆ^{かみん}今^{かみん}操^{かみん}の^{かみん}平^{かみん}人^{かみん}の
只^{かみん}か^{かみん}さ^{かみん}り^{かみん}な^{かみん}る^{かみん}と^{かみん}差^{かみん}へ^{かみん}て^{かみん}金^{かみん}銀^{かみん}を^{かみん}ら^{かみん}り^{かみん}な^{かみん}る^{かみん}中^{かみん}う^{かみん}操^{かみん}へ^{かみん}
る^{かみん}に^{かみん}と^{かみん}な^{かみん}る^{かみん}も^{かみん}又^{かみん}い^{かみん}他^{かみん}も^{かみん}あ^{かみん}り^{かみん}な^{かみん}る^{かみん}に^{かみん}も^{かみん}あ^{かみん}り^{かみん}な^{かみん}る^{かみん}に^{かみん}我^{かみん}方^{かみん}
も^{かみん}何^{かみん}中^{かみん}う^{かみん}あ^{かみん}り^{かみん}ぬ^{かみん}ら^{かみん}落^{かみん}し^{かみん}土^{かみん}を^{かみん}ま^{かみん}り^{かみん}如^{かみん}け^{かみん}い^{かみん}る^{かみん}に^{かみん}奉^{かみん}公^{かみん}
の^{かみん}め^{かみん}り^{かみん}な^{かみん}る^{かみん}も^{かみん}腰^{かみん}を^{かみん}横^{かみん}へ^{かみん}る^{かみん}程^{かみん}を^{かみん}う^{かみん}い^{かみん}如^{かみん}け^{かみん}に^{かみん}指^{かみん}さ^{かみん}る^{かみん}



ろあきうにわかくつふみかくふ腕こきやれすに
 又喧嘩まるとせようはけり其心けの目又
 まぬの外のみ何ともや、如い心けべきと男の
 とまされがこと心けけり、とて心けいふ
 物にて内よきとせようはけり、とて心けいふ
 のたがひをいひて男の男の筋目の遠さるるこれ
 是等とて物か、とていふ、とて物かは、とていふ
 近奉細遠の等と如い、とていふ、とていふ、とていふ
 ねき、とていふ、とていふ、とていふ、とていふ、とていふ
 着うて、とていふ、とていふ、とていふ、とていふ、とていふ
 替て、とていふ、とていふ、とていふ、とていふ、とていふ



刀の鞘は必に探らるるを面々の心算とせしめ
 旗を伏せられしかば刀脇差より我丸の方へ轉じ
 我方より袖のほうに刺付て打つたの小指より下
 緒を引けりふれど一又刀の下緒と脇指の下
 緒と引けて緒づきは蒲團の下へあてられに刀
 脇指は盡て打つるは「帯」といふに其まう
 一着解て履きふくそくほききり出来たりや
 先帝とせば脇指をえ下緒といふる人帝とせば
 け外男たる者ある心懸へきり奉る筈なり何ぞ
 よし清いと因ひ不足と不足こそ男子の本義なり」
 ○教訓
 人をあやむべき事と三十一歳よりあはれなり
 孝弟の道一ちやうらん徳をわたりて安んじ



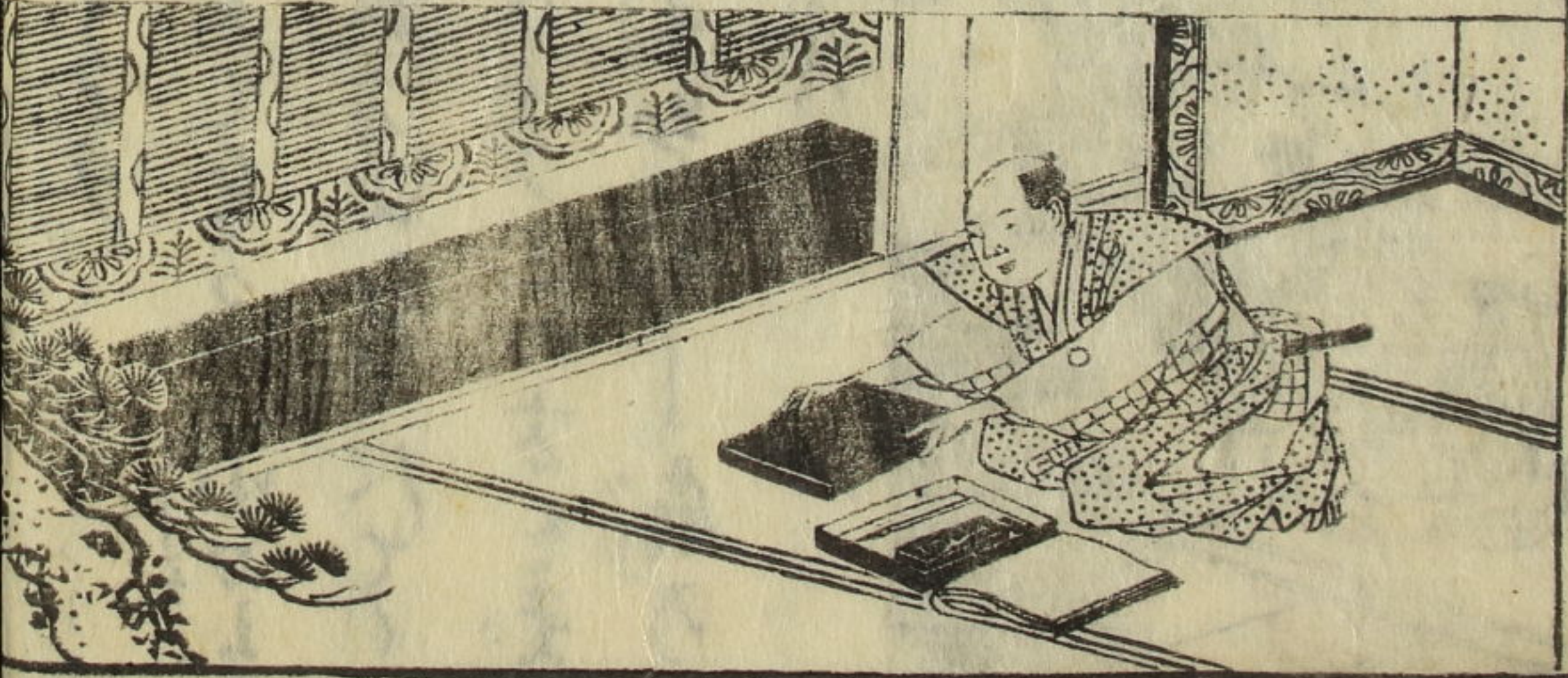
えんせん 金
 非なり 扇
 そりきれ
 ともれ 非と
 えんせん
 勢法ともう海なり
 非の雨簷と外へきと
 中よのつひ内へきと



A black and white illustration of a Japanese interior scene. A man in a patterned kimono is kneeling on a tatami floor, working on a low table. A woman in a striped kimono is standing nearby, holding a small object. In the background, there is a window with a patterned curtain and a shelf with various items.

のどくを我方へまじ
 糸をおとろふとやあひ
 紙をいどめのどくか
 こゝろをうらんで美人
 の糸くさうは少しも糸
 いさまづき五膝をいれと
 やうりて糸をつとむど
 五膝かゝり下とあうり
 と小せえまど
 記法のとさひ硯とあ
 るゝと紙をきき
 それとよ年ととあれて
 おちて一蓋の作向と
 ぎり甲は肩後ろへ

○硯料紙をきき
 紙を硯箱の巾にきき持
 出て御糸にておとろふと
 硯と紙と左右のふまけ
 硯と我方の方は蓋蓋とて
 傍と蓋めと押し蓋と
 糸を少しあうりて硯箱のふ
 らけ箱と向まじ美人
 の糸くさう紙とあうり
 るゝと並べ其まけ手板
 あうりまど



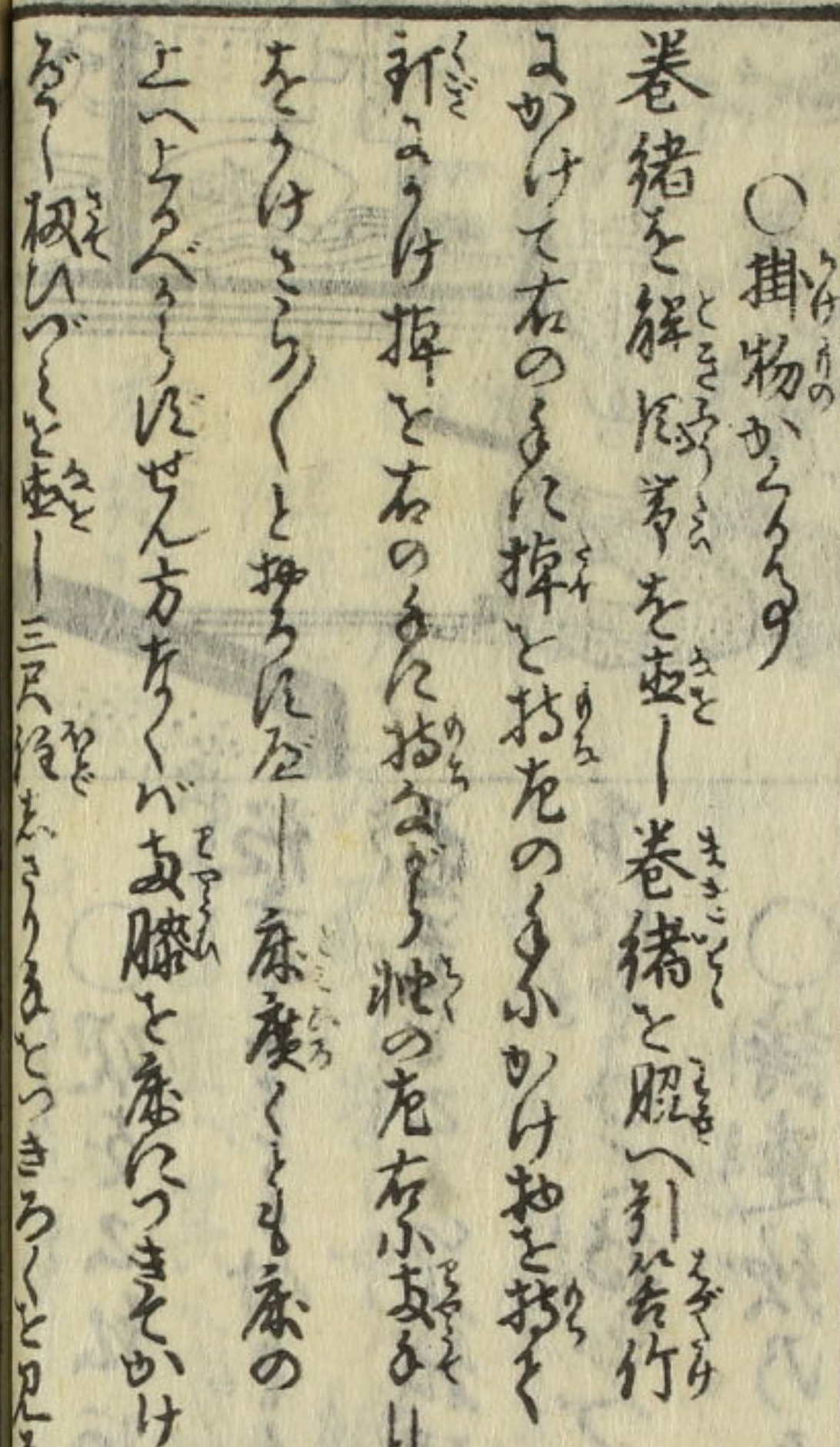
○硯を公私のいらいの事
 伝書をもり付る人の硯をいらいの紙と下
 蓋ととふ硯硯の記法とあうり紙の
 下をいらいおとろふと私と
 ○詩連歌の座敷のいらい
 我方の三尺斗をいらいの美人の
 糸くさう紙とあうり紙と
 糸と糸の膝とあうり紙と
 おとろふと用ありとあうり
 ○硯紙の目よかくる事
 我方をいらいの糸くさう紙と
 糸くさう紙とあうり紙と

ふは日軍多しと先裁きて援披き忍びて

草をい華とりはして
 本花をい花とりふはして

糸いととるゝを花はなのかと紙かみを包つつむとたる所

おぢ^{おぢ}包^{フミ}中^{ナカ}に口^{クチ}傳^{デン}あり来^来てセ換^カ扇^{せん}小^{せう}刀^{とう}に准^{しん}と



A black and white woodblock illustration of a person in a patterned kimono standing on a wooden veranda, looking out at a landscape with stylized clouds and trees. The person is holding a long object, possibly a sword or a staff, and has their other hand raised towards the railing.

三
づの掛かのうひば一いち中

二をいひより三におなり
けを考て思ふとも衆人

多分かくるきらいをきよめ

柳てのてまて端はのい尖いをて見みるる付けい

柄ときんへておぞよろしき

五子生

ある底と

孤

張

3 3

月

卷緒を解^{とく}糸^{いと}帯^{おび}を束^{たば}一^{ひと}卷緒と照^{あは}引^ひ糸竹

よやい、たのふに掉とたのふひけおとす
所ふけ掉とたのふひけおとす

をうけとらうと押るに金一床度くとも床の

上へよりぐうにせん方なくいゝ^{モアツ}膝と座につまそか

ぐ一板いふと板一三尺程よりなとつきろくとり
 書ゆさうの時の数多々く下より三ふ一を

まき上げまきあげ苦竹くちく又またわけくそと物にしすく之

○三幅對をくるるうへ先中よりけ次書

位次又主位と
かけ書附の客位中より

まきど
○巻猪の引方二幅二枚

抽へ上座の方へ引之三幅対

ま中と異位を上座の方へ

引を仕度の方へひく
ど

三幅對馬卷

緒のちやうて

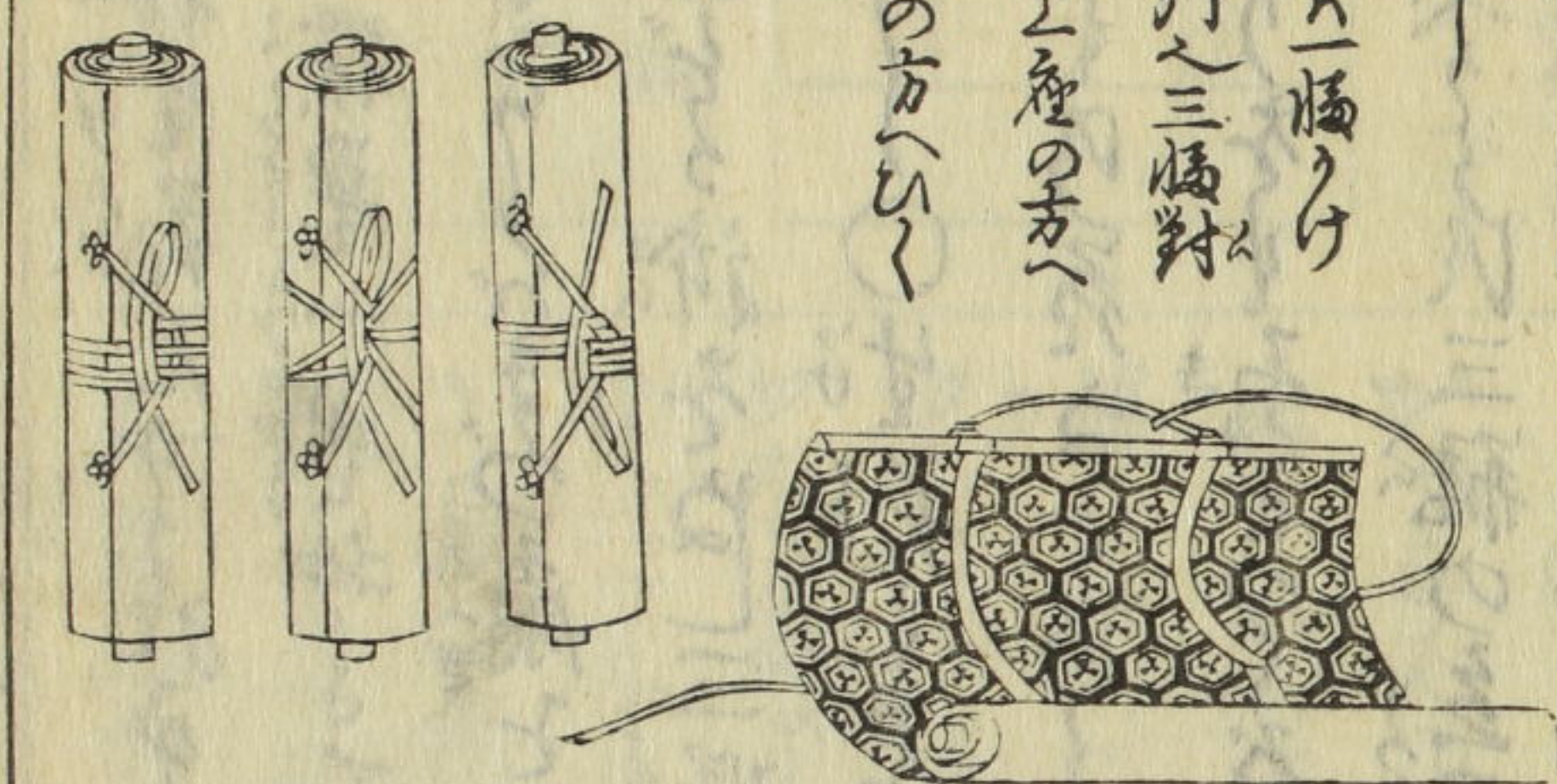


中を主露と



の 34

たかひづる たかひづる あ あ



卓香爐



○煎茶糸より茶

ども今の派新まで茶人の
 多くは湯をくき合を
 のけ湯茶湯とる者なる
 ても多く茶れをたれ
 む人のまづり出茶と
 き神られをのづる茶と
 ぬぬぬ人の茶人なる
 茶人より茶をたれを
 んどりの基より湯を
 年茶茶の湯をたの
 ゐられがれをふくし
 と飲より外の細茶
 とぬぬ茶人の茶人
 と湯茶とぬぬ茶
 りより茶茶とぬぬ

され茶天月と捧る人
 茶人より茶をたれを
 て飲より茶人より茶
 茶人より茶をたれを
 ぬぬぬ茶人より茶
 とのぬぬ茶人より茶
 ぬぬ茶とぬぬ茶人
 るのぬぬ茶人より茶
 ぬぬ茶とぬぬ茶人

ど時買の茶

碗をあらうりより茶
 らぬやうの茶をくき
 茶人より茶をたれを
 ぬぬ茶とぬぬ茶人
 とぬぬ茶とぬぬ茶人
 るのぬぬ茶人より茶
 ぬぬ茶とぬぬ茶人

ぬぬ茶とぬぬ茶人
 るのぬぬ茶人より茶
 ぬぬ茶とぬぬ茶人
 るのぬぬ茶人より茶
 ぬぬ茶とぬぬ茶人
 るのぬぬ茶人より茶
 ぬぬ茶とぬぬ茶人

○人の腰の物見せり

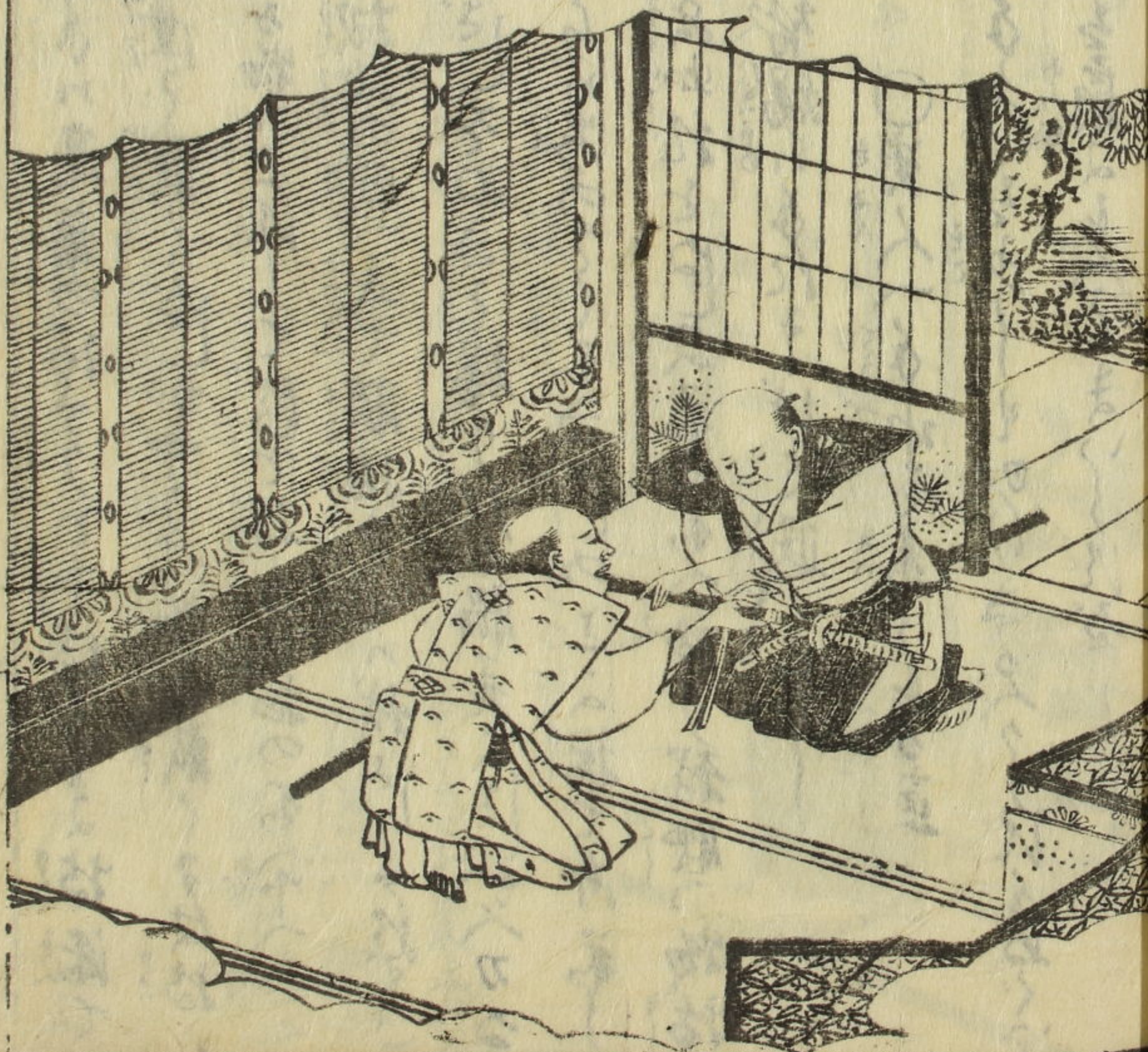
先我まきじをとりて
 ぐんまき腸茶の茶を

ぬのききしそとくくしと
 ぬけゆるりうさま付い拵
 をまうと拵とやとゆうぬ
 きりこれしむひの方とす
 らにぬのらとてとくく
 拵とむびどーとてに
 の物をぬくいぬをぬと
 さいい拵をさとしとぬ
 ぎうをぬいぬととと
 さいとぬるるに拵と拵
 ぬいけてあー

○刀脇差はさまうの
 うの表より裾をぬき
 うまう一人はさまう
 と右のふと進角のふ
 又下裾はさまうと
 をさまう刀のぬきと
 元のふと仰向小座の方
 へさまうとてさまう
 洋差さうの後に人の右の
 もの何うを我右のふと
 あとのけ下よりさまう小座
 の方へ元のふとさまうのけ
 ともさまう小座をさまう
 右の袖の下へさまう元の
 のふと放さるー
 ○刀脇差を組んで後と
 二腰ともさまうのふと一
 つはさまう腰のふ
 いふ右のふと人拵と

うち既柄まりうととくくしと見るぬ」さまうの
 人ぬを見よと何うの小刀并と拵と右のふ
 と拵とさまう元のふと拵とさまうと拵
 柄をぬけるー拵をさまうは拵とぬ
 りなり美人の腰の物さうばぬのいぢを
 ぬきよさまう謹で解んぬーぬとぬよと
 あうば我ぬを下座の方へさまう右のふ
 ぬきさうと解んぬー

○貴人より刀脇差はさまうのふ
 刀さまう腰差さまうも裾りう付のふと
 ぬの方とさまうと右のふと雲形のふと

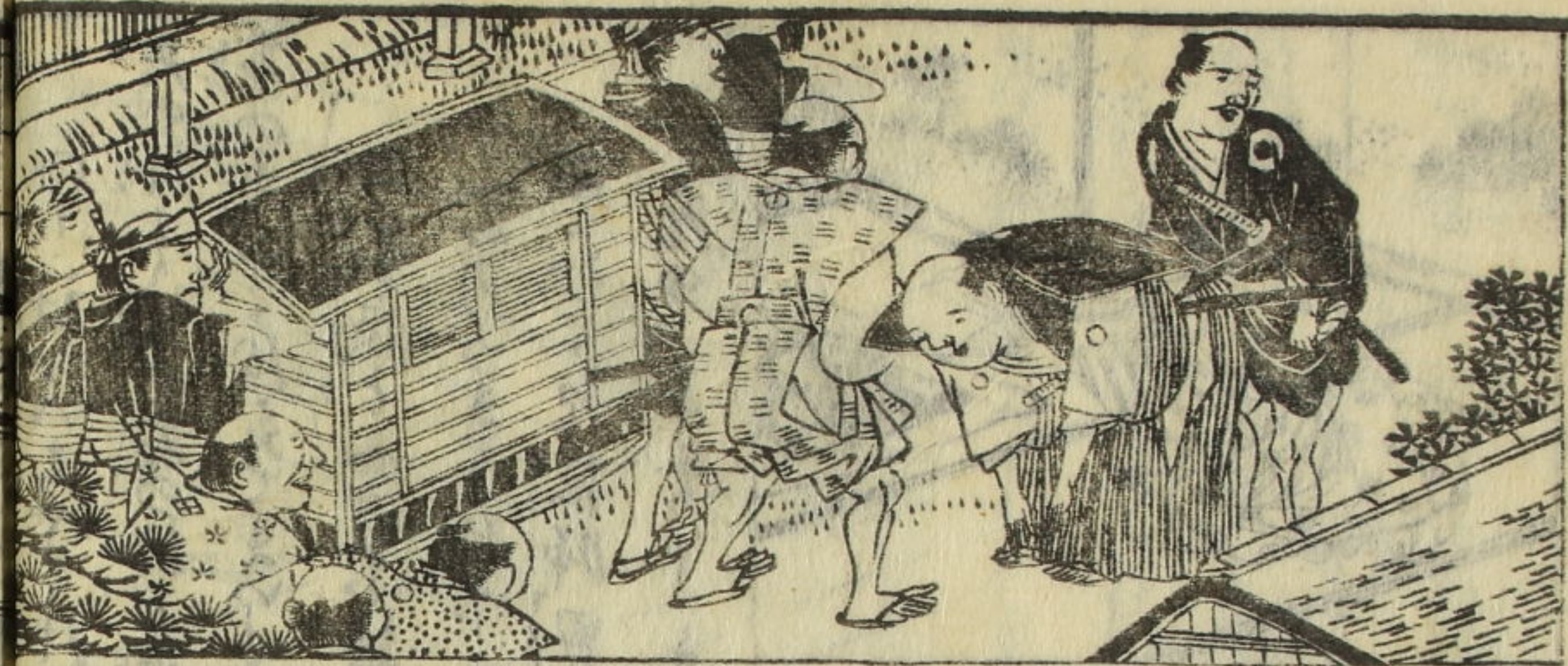


A black and white illustration of two men in traditional Japanese clothing. One man is kneeling and stirring a large pot with a long-handled spoon, while the other man stands beside him, looking on. They are in a room with a sliding door (shoji) in the background.

A black and white illustration of two men in traditional Japanese clothing. One man is kneeling and stirring a large pot with a long-handled spoon, while the other man stands beside him, looking on. They are in a room with a sliding door (shoji) in the background.

乙家衆と女の小袂争ひしは
 右のつまをば下うこそとせし
 無むそは法師男の小袂そ
 丸のつまをうへとせしなり

A woodblock print illustration of a man in a patterned kimono kneeling on a tatami floor, looking out a sliding door at a garden with pine trees and a stone lantern. The man is wearing a kimono with a diamond pattern and a striped sash. He is holding a fan. The garden outside features pine trees and a stone lantern. The scene is framed by a sliding door (shoji) and a low wall.



より多くはいつくそをうぬひくう
 ○興系物と逢てれ 逢中も今逢心持の事
 興の右よりけくれは ○女は途中より今
 あふふ時日軍うん我花と通にじ美人を
 が我右の方と通えー

○教歌

あーに逢れども必さば何時も在り方とよきまはに
 じのた右方脇抱お肘いたりま刀右にまきこー
 興の内へ刀脇を並せれた刀いひうり脇抱を右
 じの花馬の糸をこ通るまよ花後で逢場へ花馬
 ○基お基盤るまよー 換の事



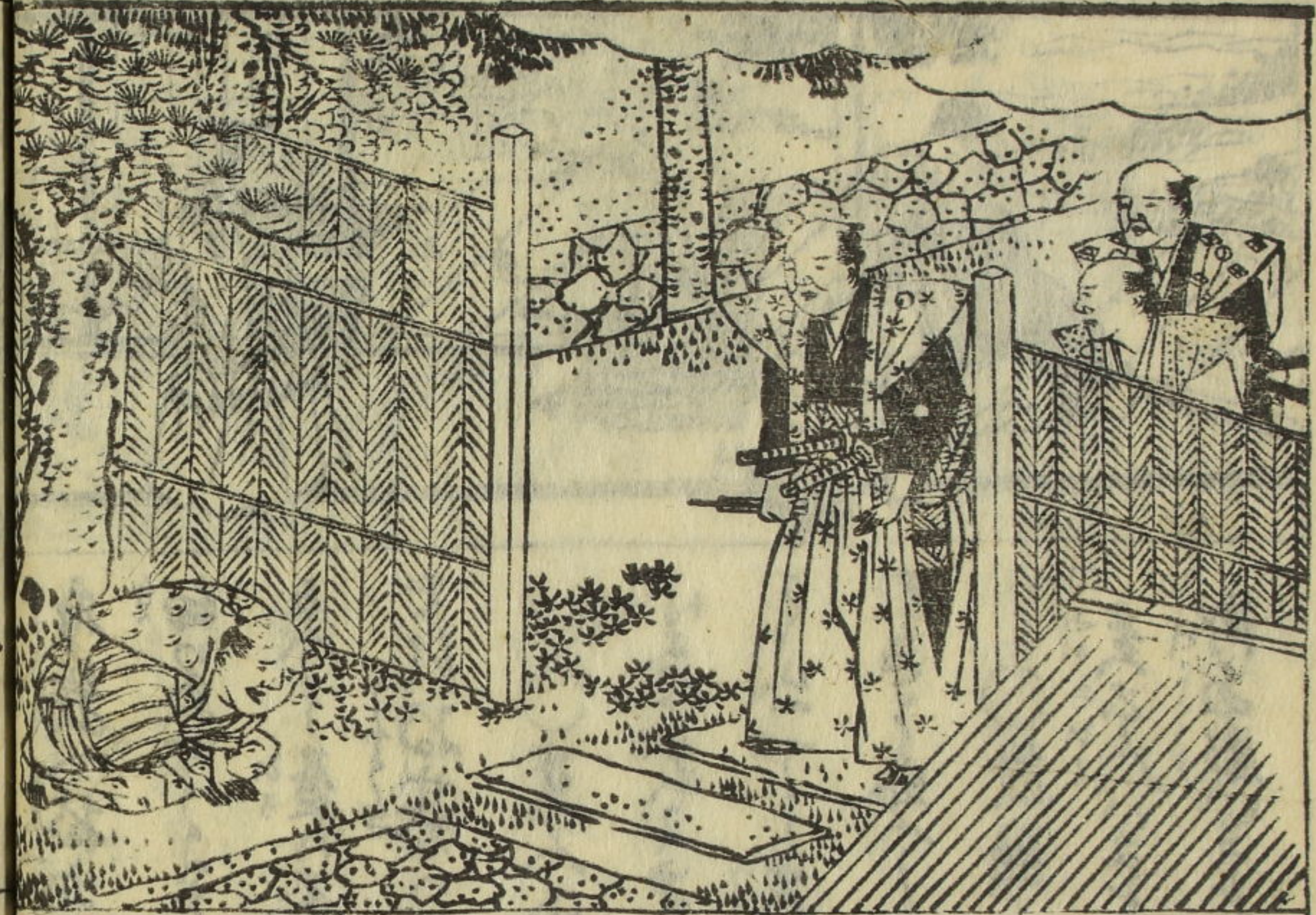
後後へお出格にさぬうら切目と美人のかえ
 向うぬやうなまはに じ方切野老の腰に格別た
 るべー 盛い花石と貴殿とに後い白石と貴殿
 とにお基い玉と息をうこさう花貴殿と

○美人小座敷よりいまは時つ

小座敷より美人をいかに脇抱をぬき次は最
 く出べー 女は美人の側へ来るこそ脇抱を
 ぬきと出べー 士をまに格別の事

○教歌

美人人いまは通うわらう花石の方のまに膝と突
 柳あ殿いまと同と知なう花石のまに膝突と腕へ

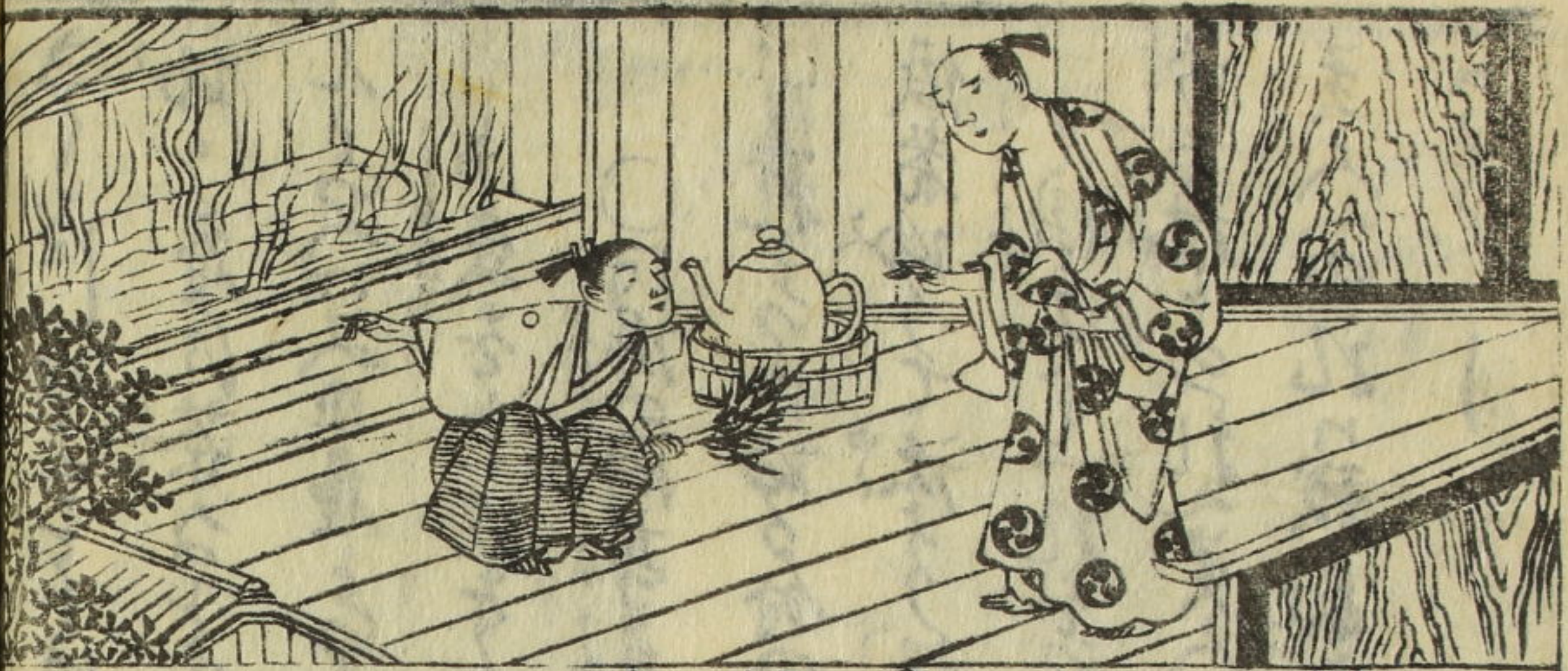


○美人私宅へ此の附の事
美人へせ給ふ附の中へまゝに迎へ
出曉て清く御向ふふつた貴
人様へより給ひ極のよへみどり
度安へ入給ひ極のよへみどり
て勝をへ立給ひ

○美人より此後下より附の事
後者よりとていふとせば此後と
されといふと上座へ入給ひ
後者も辞退たうと上座へ入給ひ
其附亭より末座より入給ひて

きくはしはよとて後者が座へ
ゆり座に茶など出く後者後
んとていふは座といふと上座へ入
給ひて
○同席の附亭より送れの時
け送れといふゆり附の事よりあは
後者ゆりて清く後者の面状は
ても後者もこれをもて後者の
旁と付とのれに美人へのれより
美人へのれに我れより附安
みより





○甲冑をみるま

付合といふこと見れば押付と妻の方と見れば
並揃ひ一りあるて見れば是れ理と云ふこと

○風呂ぬるめを中へ入れ

美人のこの世供に事なりぬるめを中へ換へ毎の暮るく
風呂に天井の板の露を拂ひ入れ右やとぞ
美人にせ給ふ内は胸巻をぬらばとぞ○愛
の人垢をぬる梅子よかゝり吹く尾花なり

○土座のれのま

押違ふ途申すて美人に眺ひこれとぞ何と
おに多様つてうけぬ是れ甲の上よあ勝の同か

あまをほきれとぞ

○人形をて書物見へき事

口を二三枚さうと見申せば二三枚見れば又
一二枚見れば押さ

○屏風を中へ入れ

墨繪と彩色とぞ人一双なり絵の書物
上統と下統とぞ一墨絵の上統ハ下統とぞ
上統等ハ下統とぞ水ハ下統とぞ別とぞ
まん中とぞ二つとぞ右へひらくぞ

○美人れ茶をて茶をほく事

はらぬとぞ茶をて茶をほく事





もしも名をきくことなれば
ぬれも一期を志せり
たびくればはしとぞ



むね伏し客の影をくると月ひ相傳の客もそ
もくの心はききしと群退とも一たびは強
群退ともなれぬ貴人物を同為するき
其座は同席の人ありはありたるありとも
ふ退はききしと一退の人とて代りて
言ふ人ありはありたる通うとやいぞ

○衣紋つきの事

衣紋つきのゆづりたる正しく着はしふも
うづらをはしとて離の衣裳のどき着は
ふ前座あるのあらうと人系にて袴のいど
結ひたるも甚なれなり

○月はりの歩ゆりなり

のけぞりあるの横柄なり腰のうなる愛之豆をあけてなら
くと歩ゆりなりはききしとて横がりの出づる
それともようび何なりとてはまづうぬやう
眼を付てありくは月づりひの横がりの出づる
け方とてききしとてを視きしとて月づりひの横がりの出づる
あふあふ膝はききしとて用きしとて横がりの出づる
第一とてききしとてはの年とて入る若しとてはききしとて
へいなるに神はききしとてはききしとてはききしとて

○着るもの物踏蹴なり

付ふしとてはききしとてはききしとてはききしとて

物何^{ナニ}カ踞^{すま}ひく傍^{そば}へ坐^まし通^{とほ}る也^{なり} 草履^{ぞうり}の足^{あし}又^{また}付^つくものこ
ゝども人の交^{まじ}履^ふをふく付^つくる事^{こと}多^{おほ}しきなり

○言ことばはきの事

るううに低ううに口よりなりて事になく危瀬沢の皮へてさ
 じわうぬ中ううにさしきをけけき第一の紙一き
 河づうい俗の流物とば腰口と云ならん人希て風をいふ
 たといふと云ふ之も上様の通どあきやどまれと云ふ人
 へ對して云ひさるべし人の嘲へすに我も咄と仕出さるる我れ
 つうくとも人の話とはさくとも事さぐ安べき人とのひさすと我
 が別あとのやうに云へるに誰かあやと云ふと云ふべし

○相傳しやうでんの事こと并なに諸事しよじの如ごとく

相付^{あひあひ}の美人より先^{さき}（外^{ほか}）に美人と結^{むす}ちあひたりし中^{うち}にわかれ之^{これ}を恨^{にく}みいふ
 中^{うち}にわかれ結^{むす}溝^{うみ}のふちまひにても亭^{てい}主^{しゅ}（對^{たい}して解^{かい}退^{たい}とて）にふと
 うく云^いぬもゆ^ゆに美人へ乃^{すなは}ち申^{まを}馳^ちま^まに思^{おも}ひ入^いら^るるゝとて接^{あひ}接^せ
 せむ^じ○端^はの知^しれとて美人の座^ざをその竹^{たけ}のしる氣^きとほけけ
 たりとのゆぐとありの座^ざに藝^ぎのうゝてて捨^{すて}風^{ふう}強^{つよ}く障^{しやう}子を立^た
 たりとてのゆ^ゆに○又^{また}美人一座^{いざ}の附^つ竹^{たけ}で閑^{いさ}事^{こと}ありて美人へ云^いふ
 人^{ひと}来^きては迷^{まよ}次^{つぎ}れる（立^たて）美人書^{しよ}状^{じやう}なと申^{まを}は^はる書^{しよ}結^{むす}り
 遠^{とほ}くして月^{つき}のさうぬ夜^やもある次^{つぎ}（立^たて）○貴^き人^{うん}老^{ろう}人^{どん}などの處^{ところ}と
 同^{どう}ぐらうに客^{きやく}の茶^{ちや}に大^{おほ}猫^{ねこ}など叮^{てい}々^々とてゝ

○途中人と云ふ事

貴人^{きみん}老人^{らうじん}我親^{われおや}の奉^{ほう}祀^いの人^{ひと}と連^{れん}立^{だち}附^{つけ}の^の話^わに^にき^きく^く終^は了^り

の歳よりふ筋遠てはにやど日暮にやは肩をさへては
 美人と連る時迄入りてはべ一疾るまでやは門の溜のす
 かりあうこうげれ換かりあふとけなきあうそいふれへもて見
 合するあやうーそれと供より教多歴くの人なりい若くて
 ○途中より美人老女あひ
 て何方へ所寄さぐされの
 新衣と同くすまれなり
 ○疾れり歩けり時けは
 の門をさへてさうあふ
 老の足とふに右の足
 をのじろ右の足とて
 見そのら右の足とて
 てはべー



あはれなるもあ

○座敷あひいらひの事

勾当より大膳お家日換乃何らひさ
 ざーをきて引右の袖の上とそとて
 引どー座にさきく其席の長老二人
 三人を引合せ其外い悉く引合ふ及ぶ迄

○貴人のあひりて鼻とらむ

次へ立てかむべーまじる首尾かへ下座へ
 向ひけ低くかゝて鼻をぬぐいそくは
 る鼻をかむゆい袖あふ低く短くう次ふ
 めれど短く三切あふさくさくは平生あ
 かくうと習ふは独居
 不かくも鼻をかむすまれ之○あふびの
 びはさきく

三十四

我^{われ}う^へ先^{さき}より人^{ひと}々^々集^{あは}りて始^{はじ}りていふ我^{われ}居^ゐるき左^{ひだり}右^{みぎ}斗^{たう}より代^{かへ}

講師への拜礼とかいふ所多き

○ 鞠まり見物けんぶつのりんご

熱て船場と鞠の場と通るより

知人なるは筆をぬぎて礼

と云ふ見物と云ふは園座を要

まうさう
ど鞠流迄て見物の中へ来りて

ふそおきるぞー捧げきん

と却て不礼なり

○鞠まりはあれまきぢふれを

我々も此と名目い美(夢)

朝草より又たふさふさ

[illegible]

はらうなり袖めしく膝る

を
方かたといふ足あし着きをく當あ

中々々々々々々々々々々々

酒を湯に

と出づるやうにその中

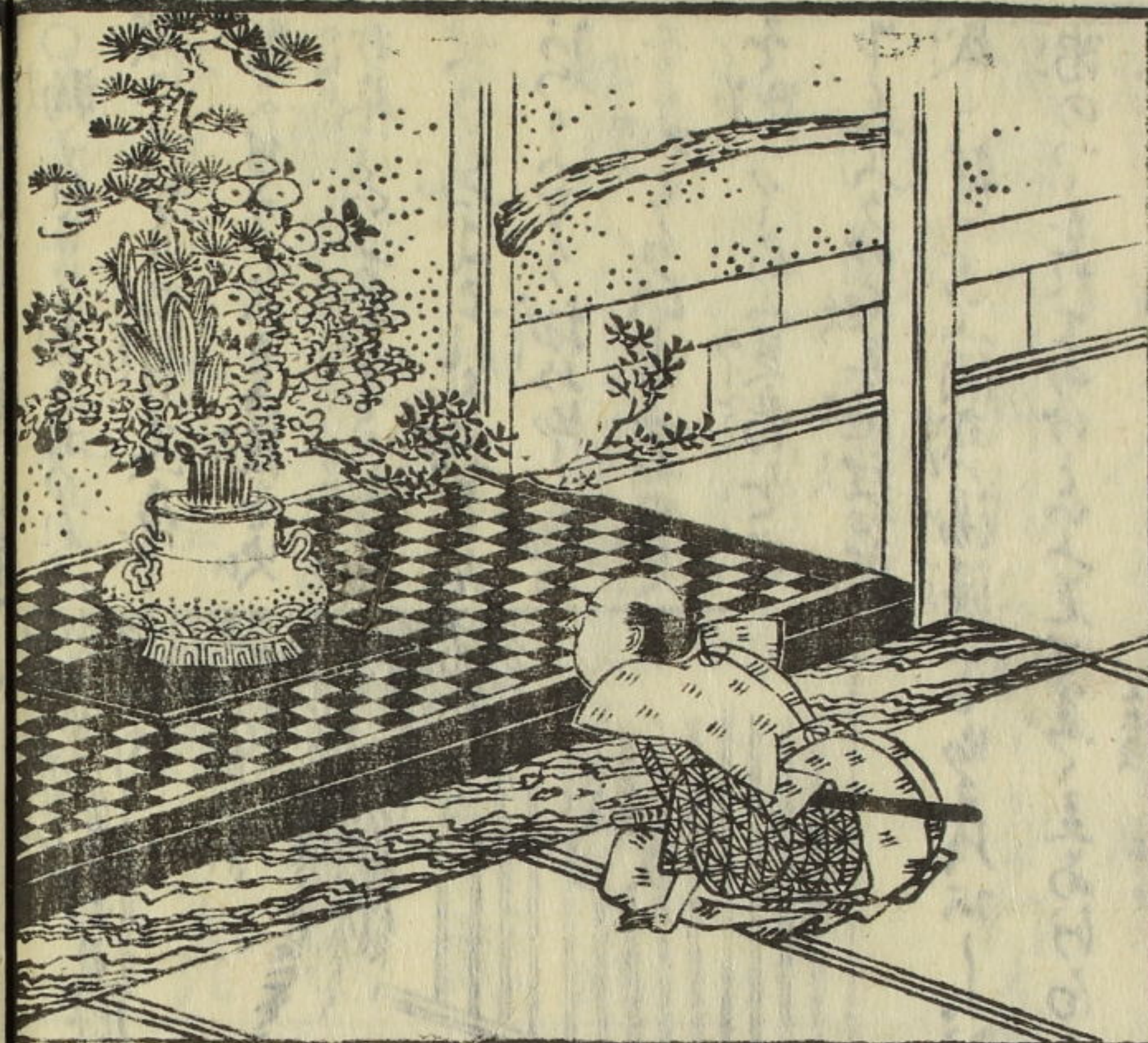
上瀬免皮の端松口本
角子乃上落松口本

問免皮小級皮少きは



○鞠場の数秋

明くは鞠のうけは松樹の枝に松籠り
鞠のうけは松樹の枝に松籠り



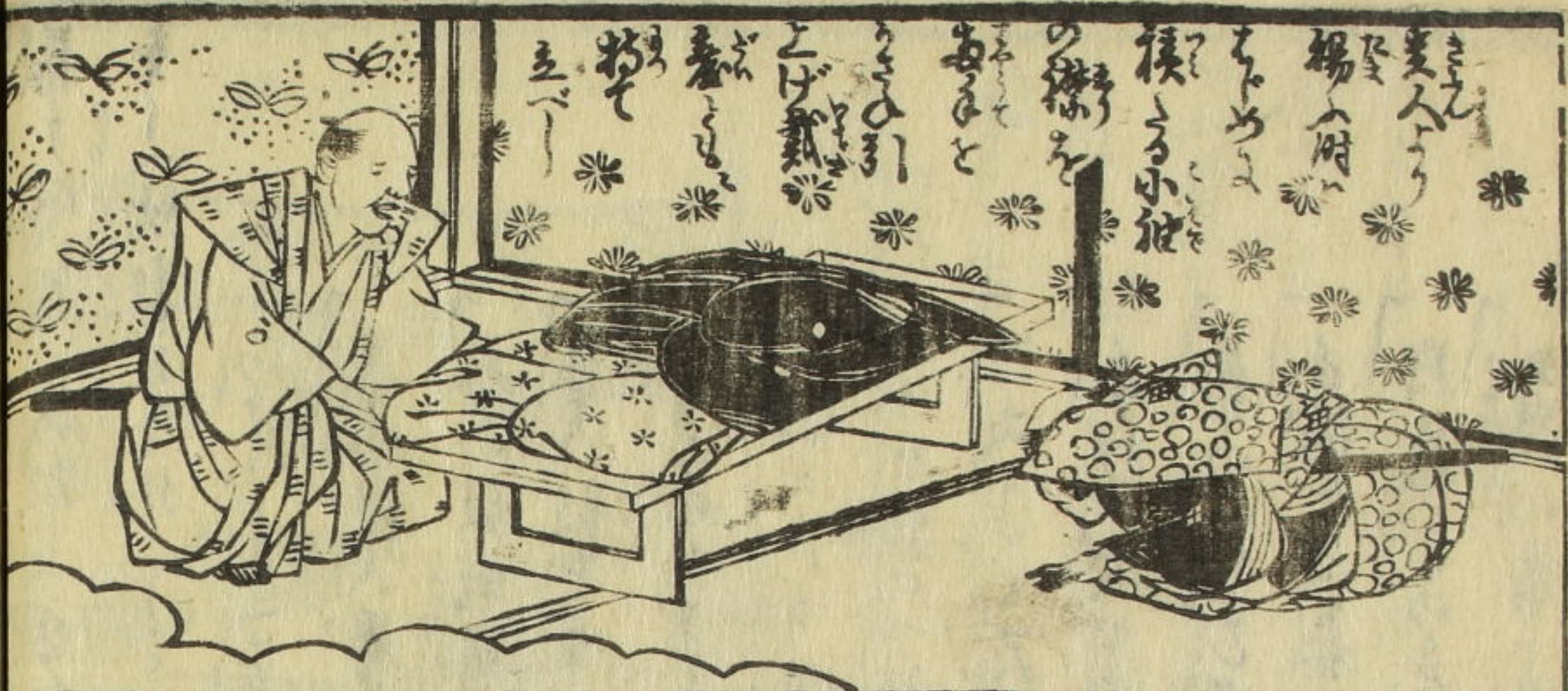
○立花見中りれ事

先こゝろふ庭をぬきゆれ庭を
乃横を一帯をぬきゆれ庭を
はきまづあんなきとれ一帯を付
次升よあんなの庭の枝は目を付
さて花のうけ枝は目を付
露りら露りらしと見て水き
をみるなりはととて水き
いとやめあんなを称花右のうけ
枝を横其後付とてし見
を賞るなり

○幕出入り事

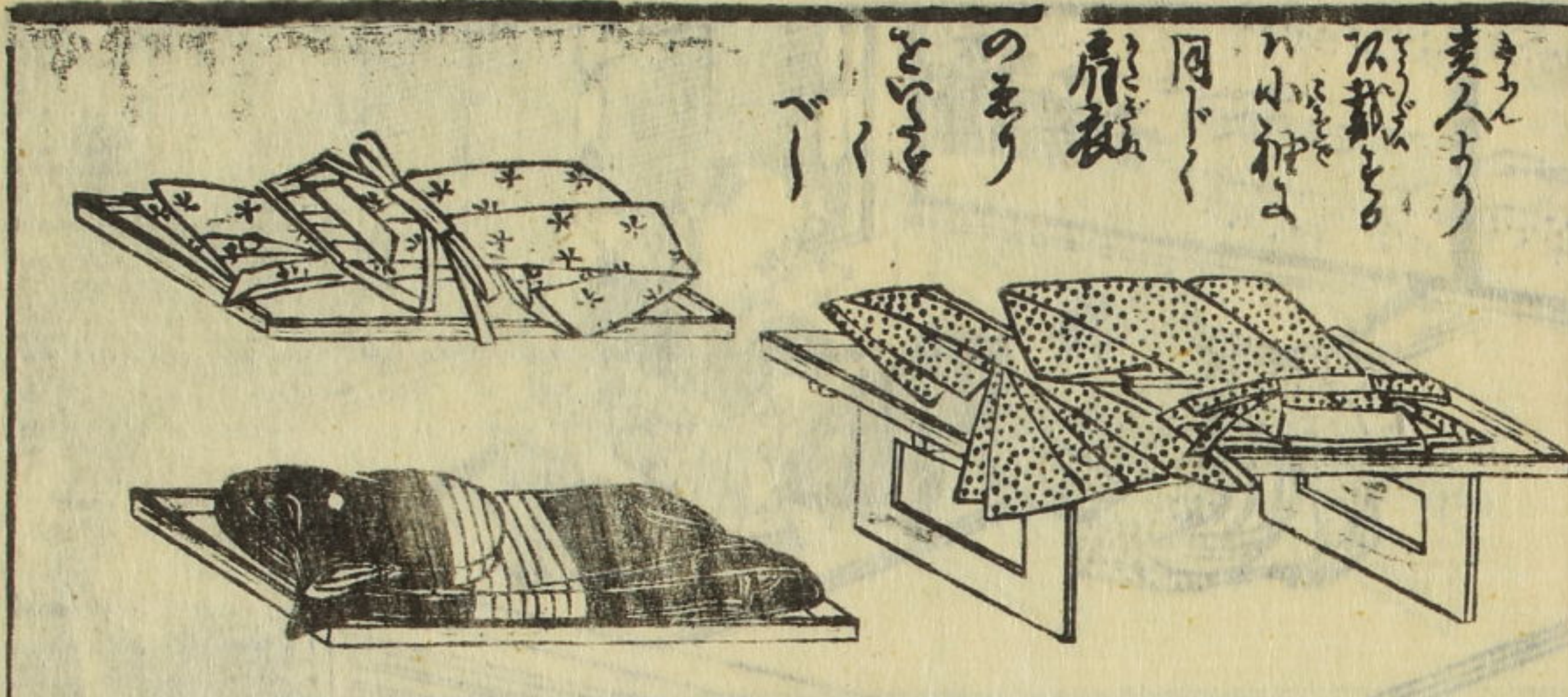
ゆれ出入り外は隠きて芝の界と右のふも下よりい
はくしりらげなり我の内へよりこゝろ花へまわりんと
ふりおる幕をじゆへとてまわり裾をえとて
右へまわりんととておるなりまわり裾とてえとて
○簾は月しとて得たり簾のいせとてあより出入り
○常の幕うちやれり

幕一帖はまき串に中なりにはかゝる内は多門どし一対
うり附いた花右をぬきゆれ庭を幕の内はまき我
若殿のまきとてせとてやうとてとて一はとて
外よりとてとて



○障子襖出入の事
 付着てそれ下座の方を向けて出入る
 互に出入るに依りて座のものと居るもの
 とて何れよりして座を立る

○臺より小神帷子襖中より
 臺を撥くゝ我座の方より襖を
 小神の襟を右のふちおたのふちの袖と
 お下りのふちを中より二ツ
 お珍と先へはゝつゝ襖をかき
 らとへおたのふちを二ツ
 おれ袖いとわたりおたの袖の小神は次
 の袖のうしろより襖を小神多くありても
 右のふちよりつゝて



○臺より小神帷子襖中より
 臺を撥くゝ我座の方より襖を
 小神の襟を右のふちおたのふちの袖と
 お下りのふちを中より二ツ
 お珍と先へはゝつゝ襖をかき
 らとへおたのふちを二ツ
 おれ袖いとわたりおたの袖の小神は次
 の袖のうしろより襖を小神多くありても
 右のふちよりつゝて

○臺より積やうの事

「おなりは我れの方を跳うてゐるとあのけりて横は横は
おの跳を元のねぐいの内へ押まげぬと少しひろげべー

○同敷の時の事

を横し、奥も同じとあつてあのけりて跳たのねぐい
を返次は元のねぐいへ跳をまげてをこめくねぐいへ
うつむべー二通りに跳の奥と同じ雄より横神どー

を横し春と夏は雄より秋と冬は雌よりしむ

をしむは暖うふは跳をいたうへおのねぐい

懸雲雀小を臺ついで跳を曲のてしむ



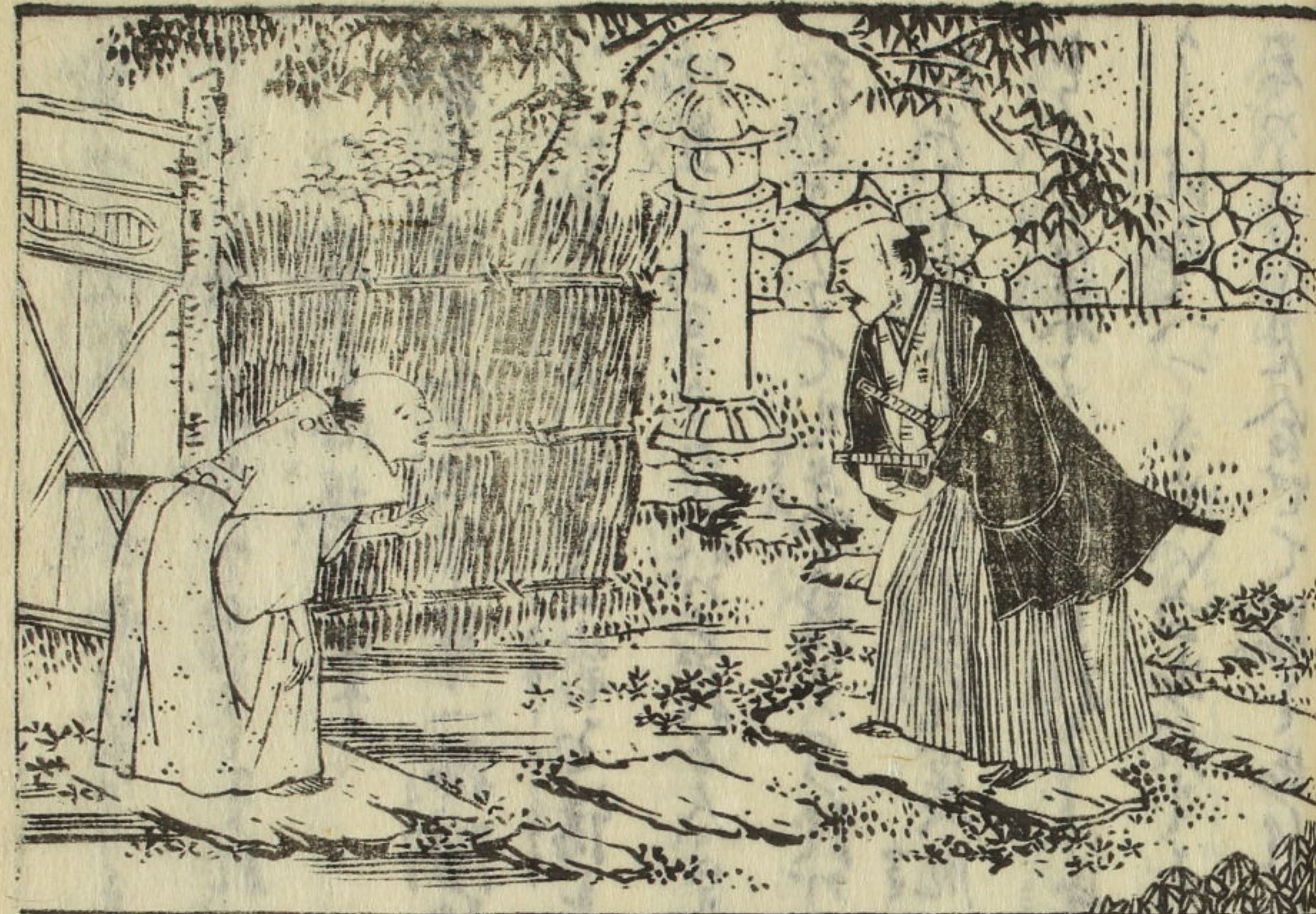
入車より中腰より低くつゝおひて香をたき三足然へ
 んう敬い拜し一るむうにそ人のく見く又ちに智し並
 居る僧の方へ向ひてれをばしてまなりけ時の長老と雖
 して僧後出く列座とる所まゝこれをもはを仕とれと
 焼香より希ひ其方を見ずともくは葬屋の焼香と
 かくれどして仕とれは香包の奉書三ツ折はして焚火
 を押しのへとす

○教歌

葬れは刀王きどしつゝは五流のりめを用ひこそと
 右法はいぬと月ひに葬れの火家の水引の布しと
 骨いらふ所と本の著る者の人のきくらふこのゆくとま

○客を招く事

人の御意にあらはせられし御き
 りまうぐうに制限をいふ人
 用するもは並て外に路次
 へての座の掃除を必しを付
 座に着て座の飾をいふ一覽
 をも感ずる神をばし其まに
 扱始後抄らめられ中うにを
 付し料理塩梅をわまりにを
 を付し云ふ多きハ都てをれ
 たり又竹と出くもむとく



喰ふは仕舞も甚多れなり老角亭の氣を付くる袴の
その氣も又氣を付くるそれくは換振肝要なり

○亭主心得の事

客を待てんと云ふ第一掃除は表入迄飾り面に相應はば
いふ我々育にせよ客を待てと云ふは紙表具の三社の
託宣にあたりうれば老れも今も悦び合して不持の掛物なくは
花むらうそと来れ我々の人をしてなりとせしむる
れなりにもいとて表花夏風秋葉冬火山にツをに委ぬ
とらぬ来よりれ餐れなり客様へ料理物をきり控え
うに座へ一やいるおれりゆ、座につきまづ茶と出
まづうく見合せて膳と出れた肝要にけ外のみて留し
なれりなり

○貴人希女中の願可診事

美人の願を診ふは必に脇差願もぬきて次の問は
そと御側へより参致てうらぶらうそれとも何なり
て参るより何れ何れと云ふはと云ふは、何れこの
もの出るが所願しと氣を平又何れなり相客体にお
の人を仰いで尋ねべし女中も押はじくおれり易なり
又腰痛腰痛悪きを發せぬなり又又問をかくは
うに後いとも問をいけぬなりやうに通じる云々をい
のるなり又近む人なりが容易に按腹なりといふは
ど多れなり

腰をより張をより張と張
り通ひのたあに弓と射
槍とつひ馬上のひ綱を外
満莖より文筆と書翰と
撃茶の湯ひや茶巾より
このとりた遙と祖一様と弁
より高腰をより脰とより
たひちやうかにこれを身
御してい朋をよりとより

○長段廣きなり



通^{とほ}ふ^ふ糸^{いと}の^の人^{ひと}の^の腰^{こし}と^と居^ゐへ^へ腰^{こし}と^とう^うて^て膝^{ひざ}の^の
 屈^くま^まぬ^ぬ中^{ちゆう}う^うの^の身^みを^を固^くめ^め膝^{ひざ}と^とう^うて^ては^はし^しと^とう^うて^て
 ぐ^ぐと^とう^うあ^あま^まう^う張^{てう}ひ^ひと^とう^うい^いろ^ろう^うて^てあ^あら^ら
 確^{たつ}言^{ごん}の^の脇^{わき}の^の下^{した}に^に脇^{わき}卵^{らん}ひ^ひと^とう^うて^てい^いろ^ろう^うて^ては^はし^し
 せ^せに^に落^{おち}も^もせ^せぬ^ぬお^おの^のど^どろ^ろは^はし^し楓^{ふう}躑^{とく}と^とう^うて^ては^はし^し
 と^とう^うく^くと^とう^うう^うに^に運^とう^うに^につ^つま^まづ^づと^とう^うて^ては^はし^し
 歩^あひ^ひに^にお^おも^もく^くた^たと^とう^うて^ては^はし^し
 通^{とほ}ひ^ひの^の人^{ひと}に^にた^たひ^ひて^てお^おと^とう^うて^ては^はし^し
 中^{ちゆう}と^とう^うて^て入^いり^りの^の身^みを^を固^くめ^め膝^{ひざ}と^とう^うて^ては^はし^し

○ 石長乃幸

多長と云ふ膳をたて方より又次て通ひの者
 へ後以役なり膳のお中より我居る膳よりお
 通ひは後以てかゝる其位受えんと出給ふ
 多しと云ふなり

○通とほの者もの膳えん持もちし

たのもたを膳の中程より少し右の方より
 膳の中程のゆびの下へはさみまうとおく
 のも右の極へそとあけておくさる我
 乳の通りよりよほど出ておど
 ろの三尺半
 膳の上へ我息のうらぬ換知り
 ぐしを中程より少し下へおど
 膳の

○脇指をさしてゐるを我
 々のエカへひらきとめ
 見てゐるが、脇指の小尻
 の指又さうやでぬくの
 故なり

○等ひとしき美人うつくしきあふをいまめ
と通とほひあふ人ひととく一度ひと又
膳えんを居ゐへきなり
○膳えんと居ゐる人ひととく又
椒こしとりとく又
○葉は引ひく人ひと葉はをり

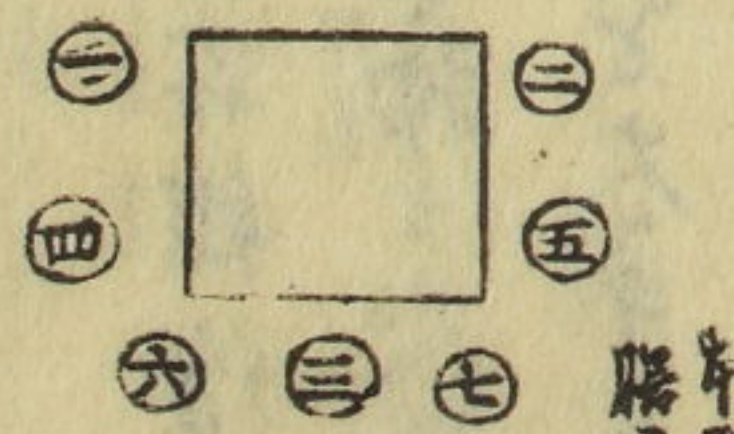
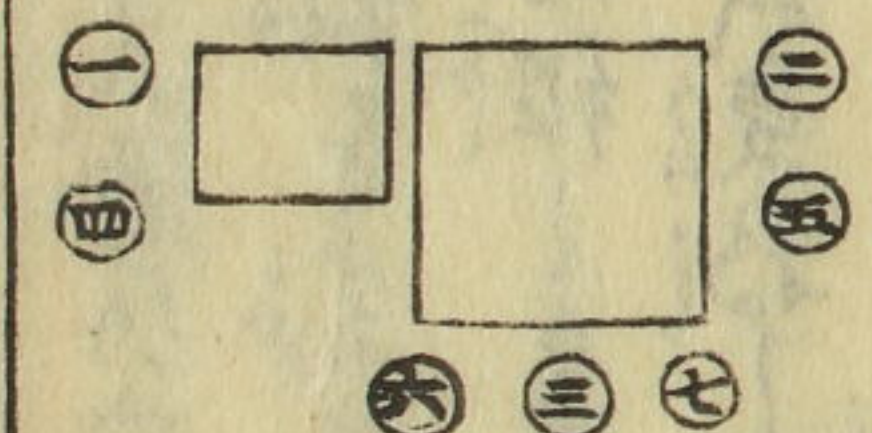
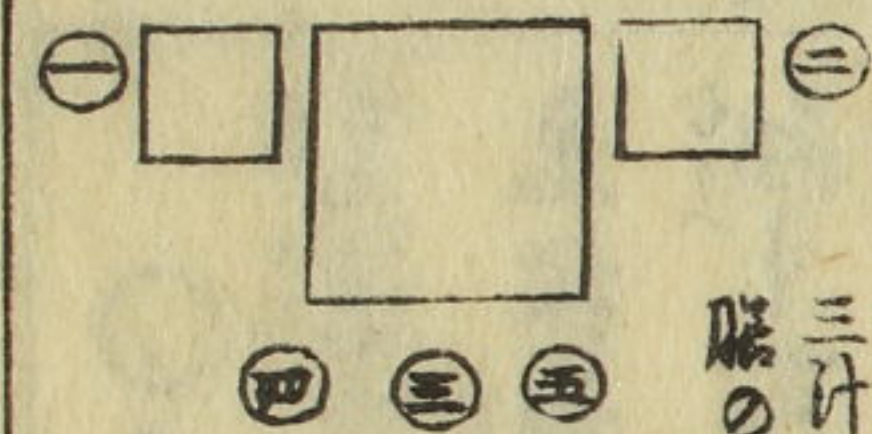
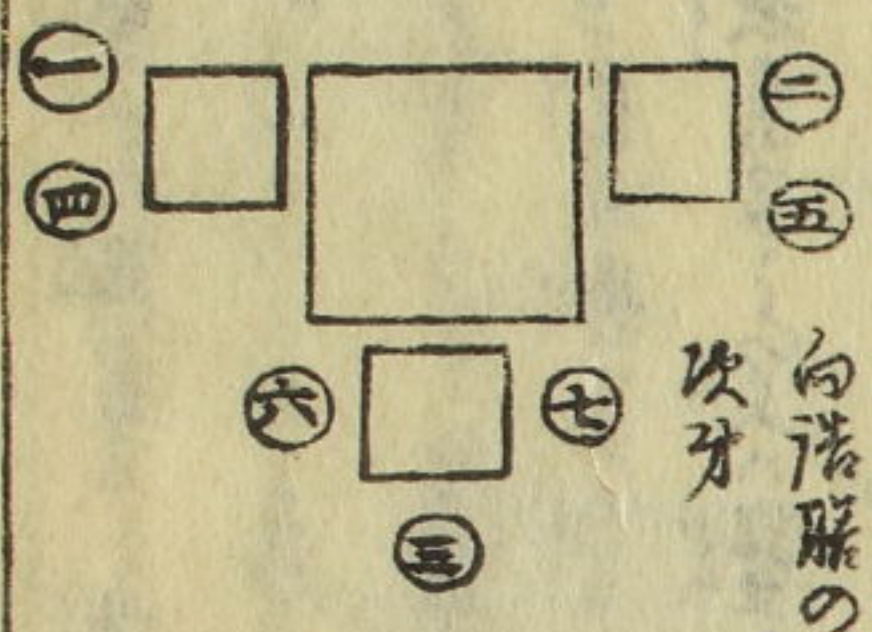


玉やうの先^{まへ}丸^{まる}の膝^{ひざ}をつき右の膝^{ひざ}をばきこ
 まふ膝^{ひざ}とよれた玉え膝^{ひざ}のひうのかと客^{きやく}人の
 丸の方^{ほう}へゆしよせくともなをころるゝた流^{なが}へ
 引てにみか程^{ほど}押込くと立止し客^{きやく}人の膝^{ひざ}へ
 膝^{ひざ}のさうたるものめしく又けまり遠^{とほ}きり要^いう

○飯のほぎやうのり

裏の飯釜の蓋をとて足抄の傍に置てお
きづぐどー冬に持出く蓋をえべーたな
と仰向く此の時客人飯椀を出んとい
ふことあることなり右のまゝと椀子をえ飯の
中と左右へ少しまけ真中を二とくひつきて
其まゝに少し出んを
後いふ人よりくもあ
まてうやうのち

○ 汁かへ中々此幸

[illegible]

○物喰ふつじむき病
ありきむかひのふり

△箸なまり

これら船とやまゐれおや
さんとかくといふ
と名くは足若一き地

つじむき

△後ろ箸

毛の焼物を喰ふて
贅物へ移るゝと云
て茶の二樽を喰ふべ

△小きうこ箸

箸は付る飯粒とも
箸を押しさへ



ふ置むうりさきおれりあははききり
ふ置むうりさきおれりあははききり
方ひんるうけりふ置むうりあははききり
お三方は押込うりあははききり
お三方は押込うりあははききり
お三方は押込うりあははききり
お三方は押込うりあははききり

○せこを入るま

これ酒りれ附上座の振うり置め
お中座にふりまうりてふりまうり
よりせこを入るま
上座より置むうりあははききり

へ酒をもいりたりせこ彼も先我の
て何れ入りたりもさへり

○臺の物同抄入物中りれ

臺は祝儀は客の教わににらり
臺の中蓮葉の上客へ出りまうり
臺のまうりふりまうりあははききり
へ置むうりさきおれりあははききり
臺は出置むうりさきおれりあははききり
お三方は押込うりあははききり
お三方は押込うりあははききり
お三方は押込うりあははききり

それハ著ス付ル飯後ニ
貯ルモノ

△新書

是ハ右ノ同ノ著ニ
綴ルモノニ付テハ
湯着ノ著ニ付テハ
其ノ内ニミテハ

△こみ

吊ヘ著スモノニ付テハ

△こみ

著スモノノ内ニ付テハ
其ノ内ニミテハ

△こみ

著スモノノ内ニ付テハ
其ノ内ニミテハ

△こみ



○おれどいハ中ノ物ノ事

おれどいハ中ノ物ノ事
是ハ右ノ同ノ著ニ
綴ルモノニ付テハ
湯着ノ著ニ付テハ
其ノ内ニミテハ

○由座の臺の事

由座の臺の事
是ハ右ノ同ノ著ニ
綴ルモノニ付テハ
湯着ノ著ニ付テハ
其ノ内ニミテハ

○茶の事

茶の事
是ハ右ノ同ノ著ニ
綴ルモノニ付テハ
湯着ノ著ニ付テハ
其ノ内ニミテハ

○食籠の事

食籠の事
是ハ右ノ同ノ著ニ
綴ルモノニ付テハ
湯着ノ著ニ付テハ
其ノ内ニミテハ

○座敷の事

座敷の事
是ハ右ノ同ノ著ニ
綴ルモノニ付テハ
湯着ノ著ニ付テハ
其ノ内ニミテハ



みづうさるなり

○飲食の事

膳にとうりやういふまゝ居るに少しもあけ
く居るにたのきを袴の裾又踏みて
へし右の足はあけず後へ座るに
のちててもかく座るなり
尚世に貴人の家にかゝりて食する
とれとせりそふさく得るは
膳を居る人の方亭よりいふ亭より息
親族よりいふは貴人よりいふは
るあり其時膳とてに座るなり又此方



よりあふと出中てえりて座るを
きうれをいふなり 膳をいふは
又亭よりいふは貴人よりいふは
人よりいふ膳を居る時あふをいふ
板のどろろに座るに人よりいふ
ざるなり 膳をいふは
食するにめまづ右のよりて飯
たのより後膳のたの方より汁
えりあに同じ板箸とてえり
もて飯をえりたのより後二箸
喰ふにえりたのよりて汁をえり

膏の油と湯菜の中と
ろくろと也れをいふ

△ろくろ著

多んに著とほけし
多んで著と引と

△うけ吸

けの再進と通ひかき
脂より墨に油と吸と

△まじり

飯と著と挽の中を
ひきとろくろと

△脂ご

脂の油と湯菜とを
多著と油とろくろと

△大食

ろくろとろくろの
は食入と居ると

右の著と飲食の

ついでに油とろくろと
多し其外挽油の中

はしるし中と著と

とろくろと著と
やきりの油とろくろと

裏と油とろくろと

右の油と湯菜とを
飯の著とろくろと

あやうと著と

ろくろと油と
ろくろと油と

とろくろと油と

ろくろと油と
又右の油と飯を食ひけの
の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

終ていゆとく挽と墨と

○飯を強る事

いふへとろくろと油と

の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

○汁の事

汁の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの

の油と油と飯を食ひけの



○湯漬の事

湯漬は洗い飯やうに握り盛て出れば
箸で中を崩して湯と七か八分
で一葉の番の物より食うが其外
も箸のよぶれざうのを食ふは汁
吸ひ実をうりを喰ふなり
の湯の湯の若をそへ湯をうけ
るぞ

番の物より一葉の
この飯の湯といふ

○貴人の物ある時の事

夫人我へづう引抽何うか蓋を
て座と立美人へ蓋と後をうすふたを

おなぐそれを受くいつてきな座へ
へるぞ又饒多の敷其外も汁の
うぬのやういとう出さるゝ受へ
降れぞ

○濃茶の事

お式一人一うのれなりゆるゝ近年
茶の湯者流の式一うと教へる
吾よりうぬるれども湯外
なれこれれの一ツはあき
まはるゝに濃茶出れば
お式一人一うのれなりゆるゝ近年
茶の湯者流の式一うと教へる
吾よりうぬるれども湯外
なれこれれの一ツはあき
まはるゝに濃茶出れば

お式一人一うのれなりゆるゝ近年
茶の湯者流の式一うと教へる
吾よりうぬるれども湯外
なれこれれの一ツはあき
まはるゝに濃茶出れば

お式一人一うのれなりゆるゝ近年
茶の湯者流の式一うと教へる
吾よりうぬるれども湯外
なれこれれの一ツはあき
まはるゝに濃茶出れば

○粥難ぢうはけとくち
るゑうは食膳湯候と目

○餅とくち口食切て伝三ヶ
月のてくちかきとくち

といふ其齒とくち冷傷
を今といふす月の形を

を伝とくち餅とくち付て
たきとくち食はけとくち

○吸拍り袖とくちとくち
吸後とくちをくち二袖とくち

くちとくちとくちとくち
軟袖とくちとくち

○串とくちとくちとくち
とくちとくちとくち

○酒人の茶とくちとくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

○我膳の裏とくちとくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

○二美二類とくちとくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

をうけのてくちけを
きんへきとくちのなり

○大流の事

大流とくち貴人酒をの
の中とくちとくちとくち

りとくちをいづくぐち酒と受て酒を
いづきのてとくちとくち

○御通いの事

御通とくち貴人の茶に
美人酒とつぎてとくち

のてとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

○石出の事

石出とくちとくちとくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

○中春の事

今俗にのりの中とくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち

とくちとくちとくちとくち
とくちとくちとくち



敬 款

ちあげかの更をまぐ喰ひてけを吸を
 一ちのけい実より先を喰ふるは
 舊の雁鴨とどれがゆをよふ成頭と寄
 もいふこれとまぐらふな——鶴の雁鴨の
 鶴々々神々々トをうへふ成頭と寄
 るうだれを厚くうへる——

朝と暮とは軍さうば盛をそれふ中より出——盛な——
 酒の間と九日の暮より翌三月三日までな——
 名とふ盛なへ出れし時より亭より出れ方へよせく盛なり

小笠原諸禮大全上巻終

